

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(35)

道路改良工事昭和～弓場ヶ尾線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

弓場ヶ尾遺跡

2005年3月

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、「縄文銀座」と称されるとおり、縄文時代の遺跡を中心に前川、安楽川沿いに200か所以上の「周知の遺跡」があります。

これらの遺跡は、農業基盤整備事業或いは宅地開発等の開発行為により、発掘調査等が実施され、貴重な資料を提供するとともに、遺跡の性格等が解明されつつあります。

今回調査しました弓場ヶ尾遺跡は、道路改良工事昭和～弓場ヶ尾線の計画策定にあたり、平成14年度の分布調査で発見されました。

本書は、平成16年度に実施しました縄文時代の弓場ヶ尾遺跡の発掘調査報告書であります。

弓場ヶ尾遺跡からは、縄文時代早期の遺物とともに、竪穴状遺構2基、集石遺構4基、土抗6基が検出されました。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この報告書が広く文化財保護並びに学術研究の一助となれば幸いです。発刊にあたり、指導者や作業協力者の皆様、また調査に御協力いただいた作業員の皆様、並びに関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

志布志町教育委員会

例 言

1. この報告書は、平成16年度に実施した道路改良工事昭和～弓場ヶ尾線に伴う弓場ヶ尾遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 全面発掘調査は、志布志町教育委員会が調査主体となり実施した。
3. 調査における測量・写真撮影は、主に小村が行い、調査の実施にあたっては、鹿児島県教育庁文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・教示を受けた。
4. 遺構の実測については、(株)埋蔵文化財サポートシステムに業務委託した。
5. 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
6. 遺物番号については、通し番号とし、挿図・図版とも一致している。
7. 出土遺物は、志布志町教育委員会で一括保管し、公開展示する予定である。
8. 本書の執筆および編集は主に小村、松元が行った。
9. 遺跡の調査、遺物の整理にあたり、次の方々に御教示賜った(50音順)。
稲村博文(串良町教育委員会)、新東晃一(県立埋蔵文化財センター調査課長)、東徹志(有明町教育委員会)、森脇 広(鹿児島大学法文学部教授)、和田るみ子(新和技術コンサルティング株式会社)
10. 遺跡の調査、遺物の整理にあたり、次の方々に御協力を頂いた(50音順)。
上原直樹、松元友美(別府大学学部生)

報告書抄録

| ふりがな | ゆばがおいせき | | | | | |
|--------------------|--|------------------------|-------------------|-------------------------|-------|-----------------------------|
| 書名 | 弓場ヶ尾遺跡 | | | | | |
| 副書名 | 道路改良工事昭和～弓場ヶ尾線に伴う発掘調査報告書 | | | | | |
| 巻次 | | | | | | |
| シリーズ名 | 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | |
| シリーズ番号 | 第35集 | | | | | |
| 編著者名 | 小村美義・松元友美 | | | | | |
| 編集機関 | 志布志町教育委員会 | | | | | |
| 所在地 | 〒899-7192 鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号 0994-72-1111 | | | | | |
| 発行年月日 | 平成17(2005)年3月31日 | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | 市町村コード-遺跡番号 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 北緯°' " | 東経°' " | | | |
| しぶしじょうあと 弓場ヶ尾遺跡 | かごしま 鹿児島県 そお 曾於郡 しぶし 志布志町 ちよう ゆばが 帖字弓場ヶ お 尾 | 68-212 131° 06' 31" | 31° 30' 05" | 平成16年 6月1日～ 8月27日 | 約500㎡ | 道路改良 工事に伴 う全面発 掘調査 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 弓場ヶ尾遺跡 | 集落跡 | 縄文時代 早期 | 竪穴状遺構 集石 土抗 | 円筒形土器・石器 | | |

本文目次

序文

例言

報告書抄録

目次

| | |
|--------------------|----|
| 第I章 調査の経過 | 1 |
| 第1節 調査に至るまでの経過 | 1 |
| 第2節 調査の組織 | 1 |
| 第3節 調査の経過 | 2 |
| 第II章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡 | 6 |
| 第III章 発掘調査 | 10 |
| 第1節 基本土層 | 10 |
| 第2節 調査の概要 | 12 |
| 第3節 検出遺構 | 12 |
| 第4節 出土遺物 | 27 |
| 第IV章 まとめにかえて | 33 |
| あとがき | |

挿図目次

| | |
|-----------------------------|----|
| 第1図 周辺遺跡位置図 | 7 |
| 第2図 土層柱状図 | 10 |
| 第3図 遺跡位置図 | 11 |
| 第4図 調査区域及びグリッド配置図 | 13 |
| 第5図 1～6区土層断面図 | 15 |
| 第6図 4-A・B区土層断面図及び下層確認T土層断面図 | 16 |
| 第7図 遺構配置及び遺物出土状況図 | 17 |
| 第8図 1号竪穴状遺構実測図 | 20 |
| 第9図 2号竪穴状遺構実測図 | 21 |
| 第10図 集石遺構実測図(1～4号) | 23 |
| 第11図 土坑配置及び土坑実測図(1～3号) | 25 |
| 第12図 土坑実測図(4～6号) | 26 |
| 第13図 出土遺物実測図(1) | 29 |
| 第14図 出土遺物実測図(2) | 30 |
| 第15図 出土遺物実測図(3) | 31 |

表目次

| | |
|--------------|----|
| 第1表 周辺遺跡一覧表 | 8 |
| 第2表 質量・体積分布表 | 28 |
| 第3表 土器観察表 | 32 |

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会(県文化財課)では、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るため、各関係機関との間で、事業地区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、志布志町(以下、建設課)は志布志町帖字弓場ヶ尾地内における道路改良工事昭和～弓場ヶ尾線の計画策定にあたり、実施計画区域内の埋蔵文化財の有無について、志布志町教育委員会(以下、教育委員会)に照会した。

これを受けて教育委員会は、平成13年12月、当該事業地区の分布調査を実施した。

分布調査の結果、当該事業区域内に「弓場ヶ尾遺跡」が存在していることが判明した。

このため教育委員会は、事業実施前に遺跡の範囲・性格等の把握を目的とした確認調査(平成14年8月20日～9月12日)を実施した。

確認調査の結果、縄文時代早期の遺物とともに、竪穴状遺構・集石遺構を検出した。

このことを受けた建設課は、設計変更が不可能なことを報告した上で、記録保存を目的とした全面発掘調査を要望した。

これを受けて教育委員会は、平成16年6月1日から8月27日まで全面発掘調査を実施した。

全面発掘調査は、志布志町教育委員会が主体となり、県教育庁文化財課及び県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得て実施した。

第 2 節 調査の組織

1. 確認調査(平成14年度)

| | | | | |
|-------|-----------|--------|---------|--|
| 調査主体者 | 志布志町教育委員会 | | | |
| 調査責任者 | 〃 | 教 育 長 | 一 木 弘 文 | |
| 調査調整 | 〃 | 社会教育課長 | 山 裾 信 博 | |
| 調査事務 | 〃 | 社会教育係長 | 杉 田 美 保 | |
| | 〃 | 主 査 | 児 島 奈穂子 | |
| | 〃 | 主 査 | 小 村 美 義 | |
| | 〃 | 主 査 | 和 佐 浩 教 | |
| | 〃 | 主 事 | 下 出 克 也 | |
| | 〃 | 主 事 | 大 窪 祥 晃 | |
| 調査担当者 | 志布志町教育委員会 | 主 査 | 小 村 美 義 | |

2. 全面発掘調査(平成16年度)

| | | | | |
|-------|-----------|-------|---------|--|
| 調査主体者 | 志布志町教育委員会 | | | |
| 調査責任者 | 〃 | 教 育 長 | 一 木 弘 文 | |

| | | | |
|-------|-----------|--------------|--------|
| 調査調整 | 〃 | 生涯教育課長 | 山裾 幸良 |
| 調査事務 | 〃 | 生涯教育課長補佐 | 米元 史郎 |
| | 〃 | (歴史のまちづくり担当) | |
| | 〃 | 文化財係長 | 外岩戸 敏幸 |
| | 〃 | 主 査 | 小村 美義 |
| | 〃 | 主 事 | 大窪 祥晃 |
| | 〃 | 主 事 | 持留 幸仁 |
| 調査担当者 | 志布志町教育委員会 | 主 査 | 小村 美義 |

第3節 調査の経過

1. 確認調査（平成14年度）

確認調査は、平成14年8月20日から同年9月12日まで実施した。

事業計画区域内の地形等を考慮しながら、新設道路部分を中心として、合計5か所（試掘トレンチ1か所を含む。）のトレンチ（以下、T）を設定し実施した。

確認調査の結果、4TのVI層を最終検出面として、縄文時代早期の竪穴状遺構（全面発掘調査の1号竪穴状遺構）、小型の集石遺構（全面発掘調査の3号集石遺構）を検出した。

2. 全面発掘調査（平成16年度）

全面発掘調査は、平成16年6月1日から同年8月27日まで実施した。

弓場ヶ尾遺跡は、東西に狭長な舌状台地に立地している。今回調査対象となった地点は、台地先端部の南向き斜面で、いくつもの小谷が入り込んでいた。

全面発掘調査の結果、縄文時代早期の遺物とともに、竪穴状遺構2基、集石遺構4基、性格不明土抗6基を検出するに至った。

全面発掘調査の調査経過については、日誌抄をもってかえることとする。

《全面発掘調査日誌抄》

【6月1日～6月4日】

発掘調査用具を現地搬入した後に、作業員への調査方法、調査上の留意点等を説明した。

確認調査の結果を考慮しながら、遺構等が検出された4Tを中心に、調査区の西側から、縄文時代早期の遺物包含層である、V層の全面発掘調査を開始した。客土・無遺物層については、重機により表土除去を行った。表土除去終了後、調査区西側から東側へ1～6、北側から南側へA、Bとし、1-A区、1-B区、2-A区、2-B区……と呼称する10mグリッドを設定した。

【6月7日～6月11日】

1・2-A・B区のV層掘下げを継続した。旧地形は北側から南側に緩傾斜しているようで、南東側ではV層がかなり厚く堆積していた。この南東側では集石遺構を構成したと考えられる、

被熱した多数の礫を検出した。また、縄文時代早期の円筒形土器が数点出土したが、全体的には遺物出土が希薄な傾向であった。1～3-A・B区について調査範囲・グリッド配置を平板実測した。

【6月14日～6月18日】

2・3-A・B区のV層掘下げを継続した。2・3-A区のVb層から4基の集石遺構を検出した。いずれの集石遺構も小型傾向で、若干被熱していた。随時平板実測を行いながら、遺物取上げ作業と遺構検出作業を実施した。

【6月21日～6月25日】

2・3-A・B区のV層掘下げを継続した。2・3-A区のVI層上面から竪穴状遺構を検出した（確認調査で検出された竪穴状遺構を含めて計2基となる）。竪穴住居跡の可能性が高いことから、柱穴検出作業を随時実施したが認められなかった。2基の竪穴状遺構は、旧地形の傾斜地の小谷に立地しており、いずれも南北側に長軸をもっていた。竪穴状遺構の周辺から縄文時代早期の遺物が出土した。いずれの遺構も埋土の表面観察では、ゴマシオ状の火山灰を比較的密に包含しているようであった。調査区北側の1～3区の土層断面実測作業を開始した。随時平板実測を行いながら、遺物取上げ作業と遺構検出作業も実施した。

【6月28日～7月2日】

1～3-A・B区のV層の調査がほぼ完了したため、随時東側へ調査区を拡張した。客土・無遺物層については、重機により表土除去を行った。3・4-A・B区のV層掘下げを継続した。調査区南側のV層は厚く堆積しており、粘質の強い層であった。集石遺構4基について、実測作業を実施するため、詳細な検出作業を実施した。調査区北側の1～3区の土層断面実測作業を完了した。

【7月5日～7月9日】

4・5-A・B区のV層掘下げを継続した。1号竪穴状遺構より2号竪穴状遺構のほうが小型のようであった。また、1号竪穴状遺構の上位層から2、3号集石遺構が検出されており、竪穴状遺構より集石遺構のほうが新しい可能性が高いようである。さらに、2号竪穴状遺構には、3基の性格不明土抗が掘り込まれており、竪穴状遺構より土抗のほうが新しい可能性が高いようである。以上のことから、遺跡としては二時期存在した可能性が高いことが予想される。2～4-A・B区について、旧地形の把握のため、等高線の間隔を50cmとした地形図を作成した。

【7月13日～7月16日】

4・5-B区のV層掘下げを継続した。2号竪穴状遺構のプランが北側へ延びていたため、調査対象区外ではあったが一部拡張した。1、2号竪穴状遺構の埋土掘下げを開始した。いずれの遺構内も上位層がゴマシオ状の火山灰を比較的密に包含していた。埋土には薩摩ブロックも客土として認められ、木炭も多量に検出された。1、2号竪穴状遺構の柱穴検出作業を実施

した後、写真撮影を行った。また、4～6-B区について、随時平板実測を行いながら、遺物取上げ作業を実施した。

【7月20日～7月23日】

5・6-B区のV層及び1、2号竪穴状遺構の埋土掘下げを継続した。5・6-B区も遺物出土が希薄な状況であった。現況は平坦地であったが、旧地形にはいくつもの小谷が入り込んでいた。竪穴状遺構内のゴマシオ状の火山灰は下部層になると密度が次第に薄くなっていった。1号竪穴状遺構は最終検出面に硬化が認められたが、2号竪穴状遺構では、硬化は認められず、若干掘りすぎてしまった。調査区北側の4～6区の土層断面実測を開始した。

【7月26日～7月30日】

4～6-B区のV層及び1、2号竪穴状遺構の埋土掘下げを継続した。2号竪穴状遺構から最終面近くで打製石斧、磨石、石皿を検出した。また、遺構内の埋土で認められるゴマシオ状の火山灰は層を形成するほどではなかった。このため、調査対象区外（地層の堆積状態が良好であることが予想される小谷を中心）で火山灰層を形成していないかを調べる目的で、精密分布調査を実施したが、確認できなかった。

【8月2日～8月6日】

4～6-B区のV層及び1、2号竪穴状遺構の埋土掘下げを継続した。4～6-B区も北側から南側に傾斜が認められるとともに、いくつもの小谷が入り込んでいた。性格不明土抗5、6号はこの小谷部分に掘り込まれていた。埋土にはゴマシオ状の火山灰を包含していた。調査区西側に下層確認Tを2か所設定し掘下げた。その結果、剥片1点だけの出土であったため、旧石器時代の調査については実施しなかった。

【8月9日～8月13日】

4～6-B区のV層及び3-A区の性格不明土抗1～3号の埋土掘下げを実施した。さらに1、2号竪穴状遺構の埋土掘下げも継続した。1、4～6区-A・B区について旧地形の把握のため、等高線の間隔を50cmとした地形図を作成した。また、3号集石遺構について実測作業を実施した。県立埋蔵文化財センター調査課長 新東晃一氏調査指導のため来跡（8月12日）。

【8月16日～8月20日】

4～6-B区のV層及び4・5-B区の性格不明土抗4～6号の埋土掘下げを実施した。また、1、2号竪穴状遺構の埋土掘下げがほぼ完了した。鹿児島大学法文学部教授 森脇 広氏調査指導のため来跡。竪穴状遺構の埋土に包含されている火山灰は桜島起源のP13の可能性が高いことが指摘される（8月20日）。

【8月23日～8月27日】

4～6-B区V層及び掘下げを継続した。4・5-B区の4～6号土抗について実測作業を実施した。1、2号竪穴状遺構の畦畔について実測作業を実施した後、取り外した。1、2号

竪穴状遺構及び1、2、4号集石遺構については、埋蔵文化財サポートシステムに実測委託した。今回の調査で検出された遺構について、完掘状況を写真撮影した。全行程が終了したため、埋蔵文化財収蔵整理作業室に撤収した。

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡

志布志町は、鹿児島県の東端に位置し、南北に細長い形状であり、山地、台地、平野、海岸と変化に富む地形を有する。古来より良港として、交易の要衝を担い、港町として栄えてきた。

弓場ヶ尾遺跡は、志布志湾に流れ込む前川中流域の東部に位置している。この前川中流域には、前川本流及び支流によって樹枝状に侵食谷が発達している。この侵食谷によって大小に分断されたシラス台地の辺縁部に、数多くの遺跡が立地している。

今回調査対象となった弓場ヶ尾遺跡は、道路改良工事昭和～弓場ヶ尾線に伴う分布調査（平成14年度に実施）で発見された遺跡である。

弓場ヶ尾遺跡の現況は、個人の造成によるものか、旧地形がかなり変化しており、その把握は難しい。本来、旧地形は南北に狭長な舌状台地であったようで、台地先端辺縁部の南北側から遺物が表採された。

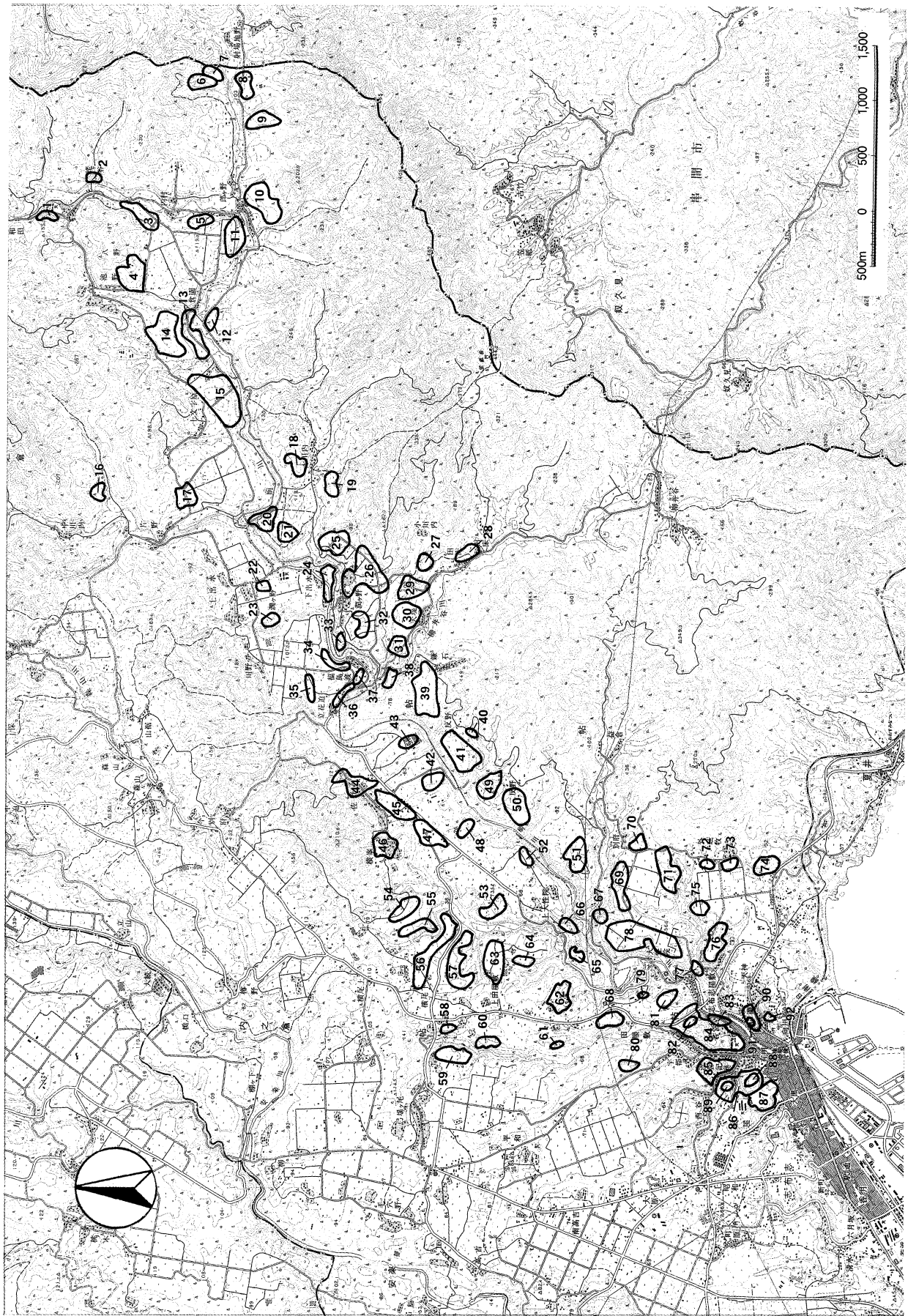
表採された遺物は、台地南側では古墳時代、台地北側では縄文時代早期の遺物が主体を占めていた。しかし、今回調査対象となった台地南側の緩傾斜地では、表採された古墳時代の遺物包含層は確認されず、縄文時代早期の包含層のみが認められた。

以上のことから、台地先端辺縁部の南北側に縄文時代早期の遺物包含層が存在している可能性が高いことが予測される。

前川流域には遺跡が数多く存在し、台地上のみならず台地辺縁にも遺跡の所在が確認されている。台地周辺の沖積地にも遺跡の存在がみられ、遺跡の所在は広く前川流域に広がっていると捉えることができる。

前川流域の遺跡は、上・中・下流でそれぞれに特徴的な分布を示している。すなわち、上流域は旧石器～縄文時代の遺跡が多く、中流域には縄文～弥生時代の遺跡が多い。下流域には弥生時代或いは中世の遺跡が多い。弓場ヶ尾遺跡も、縄文・古墳時代の複合遺跡として周知され、中流域の一端を成している。

弓場ヶ尾遺跡は、今回の調査によって旧地形がかなり変化しているが、台地先端辺縁部の傾斜地に立地している縄文時代早期の集落跡であることが判明した。推測の域を脱し得ないが、調査区北側に集落跡が拡大していく可能性が高いと予想される。



第1図 周辺遺跡位置図

第1表 周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 流域 | 時代 | | | | | | | | | | |
|----|-------|----|-----|---|---|----|----|---|----|----|-------|------|---|
| | | | 旧石器 | 草 | 早 | 縄文 | | | 弥生 | 古墳 | 奈良・平安 | 中・近世 | |
| | | | | | | 前 | 中 | 後 | 晩 | | | | |
| 1 | 和田 | 上 | | | | | | | | ○ | | | |
| 2 | 姥ヶ谷 | 上 | | | | ○ | | | | | | | |
| 3 | 井手平 | 上 | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| 4 | 池野 | 上 | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | | |
| 5 | 八郎ヶ野B | 上 | | | | | | | ○ | | | | |
| 6 | 東黒土田A | 上 | | | | | | | | ○ | | | |
| 7 | 東黒土田B | 上 | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | |
| 8 | 東黒土田C | 上 | | | | | | | | ○ | | | |
| 9 | 東黒土田D | 上 | | | | | | | | | | | |
| 10 | 八郎ヶ野C | 上 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 11 | 八郎ヶ野A | 上 | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 12 | 倉園C | 上 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| 13 | 倉園A | 上 | | | | | ○ | ○ | | | | | |
| 14 | 倉園B | 上 | ○ | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 15 | 十文字 | 上 | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | | |
| 16 | 片野洞穴 | 上 | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | |
| 17 | 浜場 | 上 | | | ○ | | | | | | | | |
| 18 | 風穴 | 上 | | | ○ | | | ○ | | | | | |
| 19 | 平原 | 中 | | | ○ | | | | | | | | |
| 20 | 土光A | 中 | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| 21 | 土光B | 中 | | | ○ | ○ | | | | | ○ | | |
| 22 | 上出水 | 中 | | | ○ | | | | | | | | |
| 23 | 出水 | 中 | | | ○ | | | | | | | | |
| 24 | 上ノ原 | 中 | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | |
| 25 | 東原 | 中 | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| 26 | 潤ヶ野 | 中 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | |
| 27 | 堂ノ下 | 中 | | | | | | ○ | | | | | |
| 28 | 田床 | 中 | | | | | ○ | ○ | | | | | |
| 29 | 天堤 | 中 | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 30 | 家野 | 中 | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | |
| 31 | 松崎 | 中 | | | | | | ○ | | | | | |
| 32 | 出口B | 中 | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| 33 | 出口A | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | ○ | | | |
| 34 | 中須 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 35 | 立花迫A | 中 | | | ○ | | ○ | | | | | | |
| 36 | 立花迫B | 中 | | | | | | | ○ | | ○ | | |
| 37 | 船迫 | 中 | | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 38 | 鎌石橋 | 中 | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| 39 | 鎌石 | 中 | | | ○ | | | | ○ | | | ○ | ○ |
| 40 | 二反野 | 中 | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 41 | 西原A | 中 | | | | | | | ○ | | | | |
| 42 | 下平 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 43 | 牧 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | ○ | | | |
| 44 | 佐野 | 中 | | | | | | | | ○ | | | |
| 45 | 上佐野原A | 中 | | | | | | | | ○ | | | |
| 46 | 横峯 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | ○ | | | |
| 47 | 上佐野原B | 中 | | | | | | | | ○ | | | |
| 48 | 下迫 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 49 | 大二反野A | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | ○ | | | |
| 50 | 大二反野B | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | ○ | | | |
| 51 | 下田 | 中 | | | ○ | | | | | | | | |
| 52 | 五里ヶ迫 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 53 | 下佐野 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 54 | 井手元 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 55 | 中原 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 56 | 上牧 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 57 | 白木牟田 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | ○ | | | |
| 58 | 稻荷免 | 中 | | | | 縄文 | 縄文 | | | | | | |
| 59 | 弓場ヶ尾 | 中 | | | ○ | | | | | | ○ | | |
| 60 | 島廻 | 中 | | | ○ | | | | | ○ | | | |
| 61 | 飛渡 | 中 | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |

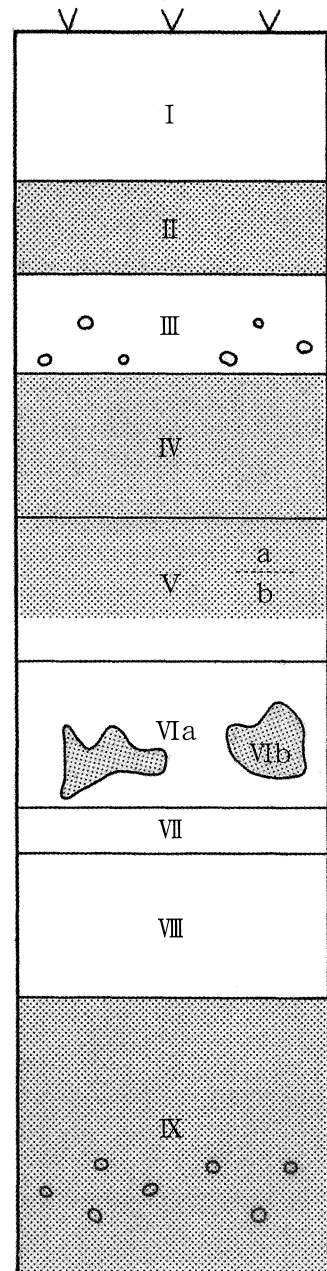
| 番号 | 遺跡名 | 流域 | 時代 | | | | | | | | | | |
|----|------------|----|-----|---|---|--------|--------|---|---|----|----|-------|------|
| | | | 旧石器 | 草 | 早 | 縄 前 | 文 中 | 後 | 晩 | 弥生 | 古墳 | 奈良・平安 | 中・近世 |
| 62 | 堂迫 | 中 | | | | 縄文 | | | ○ | | | | |
| 63 | 下牧 | 中 | | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 64 | 上田屋敷 | 中 | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ | | | |
| 65 | 坂ノ上 | 中 | | | ○ | | | | | | | | |
| 66 | 八反田 | 中 | | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 67 | 山之上 | 中 | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| 68 | 油田 | 中 | | | | 縄文 | | | ○ | | | | |
| 69 | 大丸迫 | 下 | | | ○ | | | ○ | ○ | | | | |
| 70 | 別府前 | 下 | | | ○ | | | | | ○ | | | |
| 71 | 柳之元 | 下 | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | |
| 72 | 外之牧B | 下 | | | | | | | | | ○ | | |
| 73 | 下原 | 下 | | | | | | | ○ | | ○ | | |
| 74 | 前之段 | 下 | | | | | | | ○ | | | | |
| 75 | 外之牧A | 下 | | | | | | | ○ | | | | |
| 76 | 南水ヶ迫 | 下 | | | ○ | | ○ | | ○ | | | | |
| 77 | 野久尾 | 下 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ |
| 78 | 別府(石踊) | 下 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | |
| 79 | 西中尾 | 下 | | | | 縄文 | | | | | | | |
| 80 | 道悦 | 下 | | | | | | ○ | | ○ | | | |
| 81 | 野首B | 下 | | | | 縄文 | | | | | | | |
| 82 | 野首A | 下 | | | ○ | | | | ○ | | | | |
| 83 | 小淵 | 下 | | | | | ○ | ○ | | | | | |
| 84 | 志布志城(内城)跡 | 下 | | | | | | | | | | | ○ |
| 85 | 志布志城(松尾城)跡 | 下 | | | | | | | | | | | ○ |
| 86 | 志布志城(高城)跡* | 下 | | | | | | | | | | | ○ |
| 87 | 志布志城(新城)跡 | 下 | | | | | | | | | | | ○ |
| 88 | ウドン上A | 下 | | | | | ○ | | | | | | |
| 89 | ウドン上B | 下 | | | ○ | | | | | | | | |
| 90 | 宝満寺跡 | 下 | | | | | | | | | ○ | | ○ |
| 91 | 宝満製鉄 | 下 | | | | | | | | | | | ○ |
| 92 | 向川原 | 下 | | | ○ | | | | ○ | | | | |

第三章 発掘調査

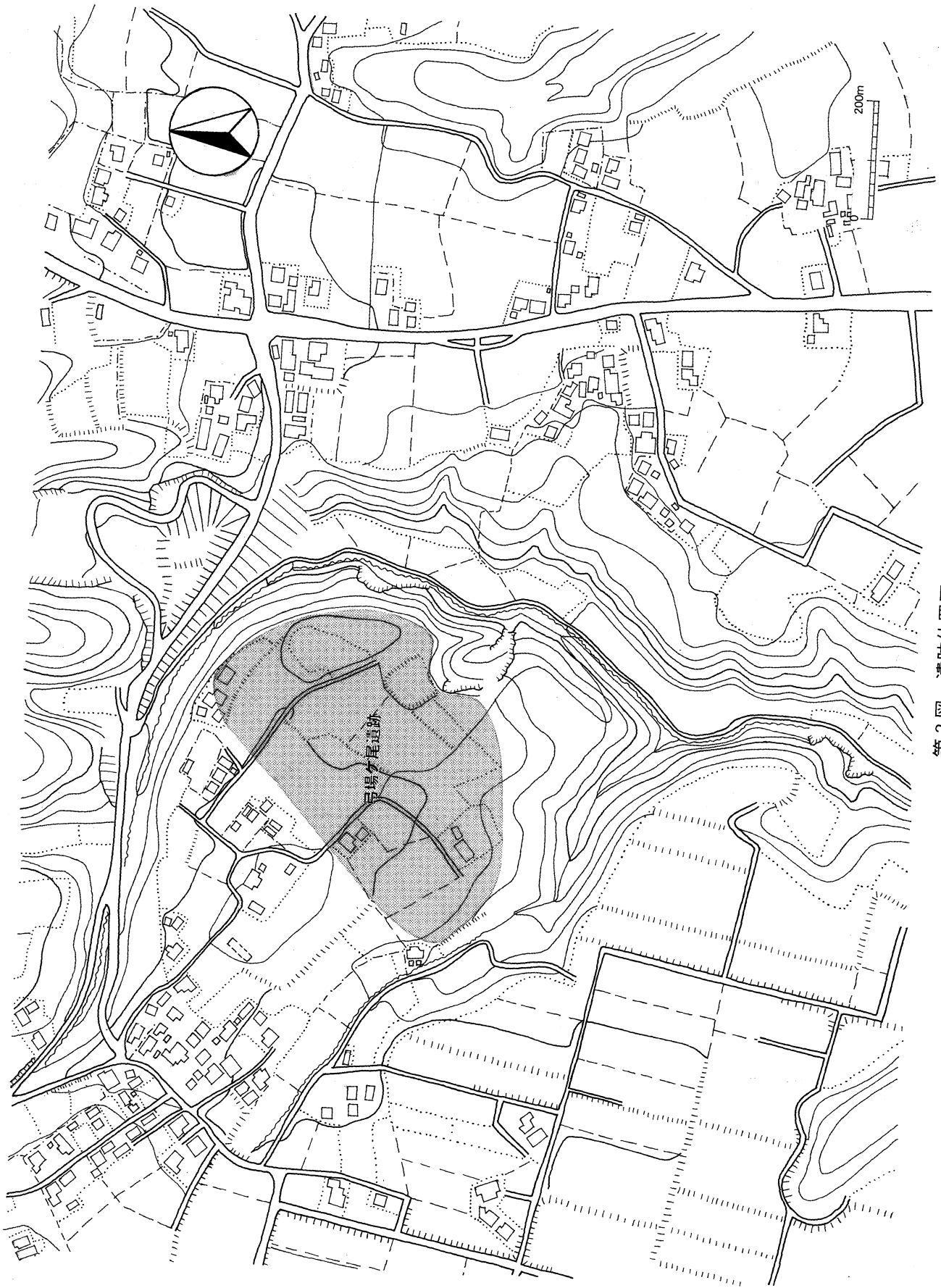
第1節 基本土層

弓場ヶ尾遺跡は、南北に狭長な舌状台地に立地している。今回調査対象となった地点の現況は平坦であったが、旧地形は台地先端部の南向き斜面地で、いくつもの小谷が入り込んでいる。全体的には北側から南側に向かって緩傾斜が認められる。

- I層：客土である。色調・硬さ等により、数層に細分される。
個人の造成によるものか、場所によっては、盛土が厚く堆積している。
- II層：茶灰色火山灰混土。ゴマシオ状の火山灰を包含する層である。霧島起源の「御池」に比定される。場所によっては認められない。下部に火山灰を多量に包含している。
- III層：黒褐色腐植土。黄白色軽石を包含している層である。
この軽石は「池田降下軽石」に比定される。
- IV層：橙色火山灰土。いわゆる「アカホヤ」と呼ばれる層である。下部にパミスが認められる。
- V層：茶黒褐色硬質土。縄文時代早期の遺物包含層である。
場所によっては、色調・硬さ等により a、b 層に細分できる。Va層では、ゴマシオ状の火山灰を多量に包含している場所も認められた。桜島起源の P13 の可能性が高いことが指摘されている。調査対象区域外で明確な火山灰層を形成していないかを調査したが、認められなかった。調査区南側の V 層はやや粘質である。
- VI層：乳白色硬質土。「薩摩」と呼ばれる層である。場所によっては、色調・硬さ等により a、b (ブロック) 層に細分できる。最終検出面である。
- VII層：暗茶黒褐色土。縄文時代創早期相当層である。場所によっては認められない。
- VIII層：茶褐色粘質土。粘質が強い層で、「チョコ」と呼ばれている。色調・硬さ等により、数層に細分できる。
- IX層：黄灰色火山灰土。「ヌレシラス」と呼ばれる層である。
多量の黄色軽石を包含する場所も認められる。



第2図 土層柱状図



第3図 遺跡位置図

第2節 調査の概要

平成14年度に実施した確認調査結果から、遺構等が検出された4 Tを中心に、調査区の西側から全面発掘調査を開始した。客土・無遺物層については、重機により表土除去を行った。表土除去終了後、調査区西側から東側へ1～6、北側から南側へA、Bとし、1-A区、1-B区、2-A区、2-B区……と呼称する10mグリッドを設定し、随時掘下げた。

全面発掘調査の結果、調査区西側の2・3-A区の小谷を中心に、Vb層から集石遺構4基、VI層に掘り込まれた、大小2基の竪穴状遺構を検出するに至った。

さらに、3-A区の2号竪穴状遺構に掘り込まれた性格不明の土抗3基、4・5-B区のVI層に掘り込まれた性格不明の土抗3基も検出した。

第3節 検出遺構

1. 竪穴状遺構

大小2基の竪穴状遺構の検出面は、2・3-A区のVI層上面であった。いずれも南北側に長軸をもっていた。1号竪穴状遺構では、最終面と考えられる硬化が認められた。しかし、いずれの竪穴状遺構も柱穴等の検出には至らず、その性格を特定することはできなかった。

① 1号竪穴状遺構

2・3-A区のVI層上面で色調の変化が認められた。周辺から縄文時代早期の遺物が数点出土した。埋土には、ゴマシオ状の火山灰を比較的密に包含するが、明確な層を形成するほどではなかった。この火山灰は桜島起源のP13の可能性が高いことが指摘されている。

また、埋土から時期を特定できる遺物の出土は認められず、磨石、被熱礫、木炭が検出されたのみであった。竪穴状遺構の最終面と考えられる硬化が認められたが、斜面地に構築されていたためか、南北側では深さに大きな差異が生じていた。

プランは隅丸方形で、最大354×312cmである。検出面からの深さは、最も深い部分で47cm、最も浅い部分で22cmであった。

② 2号竪穴状遺構

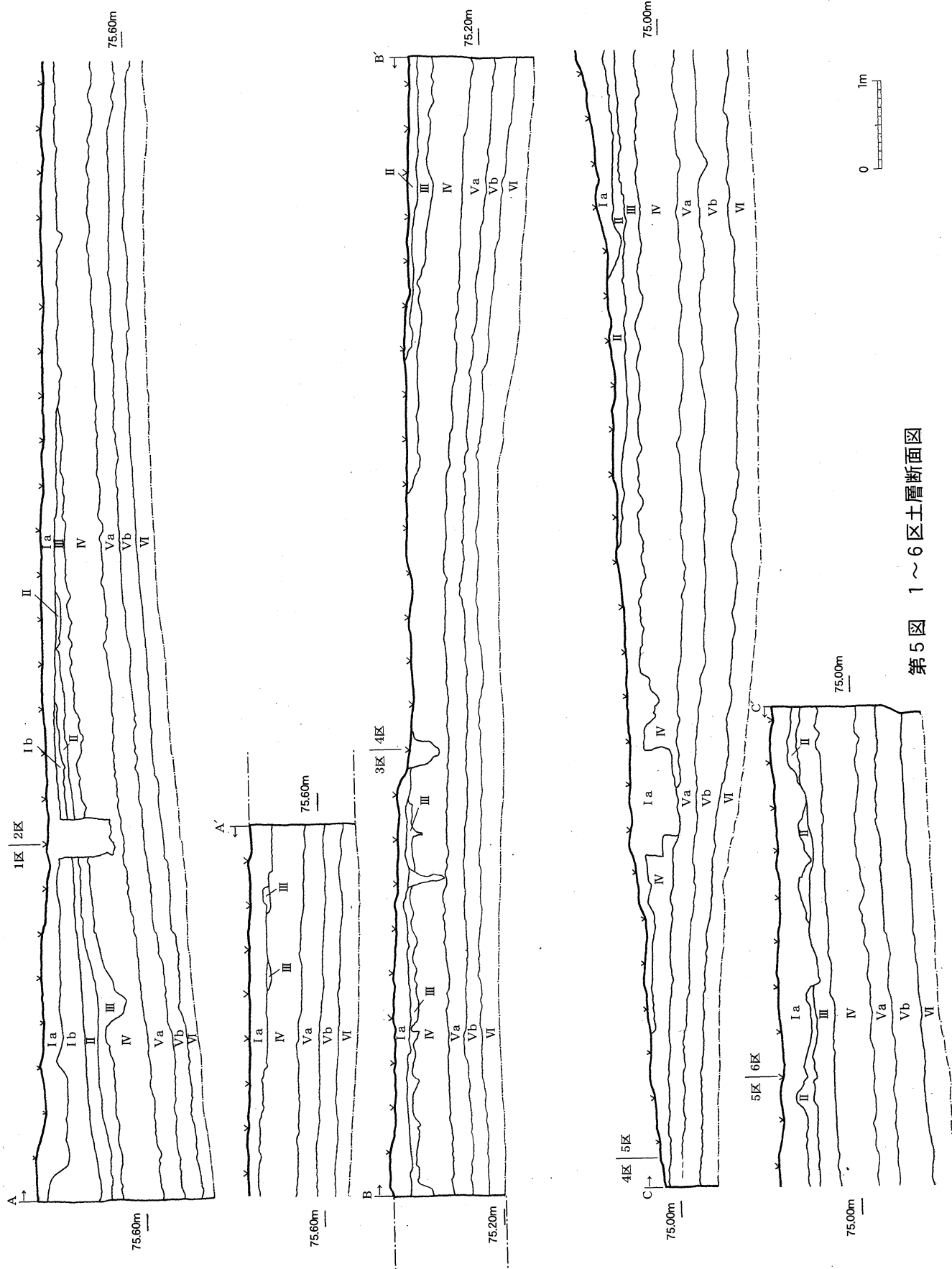
3-A区の北側に位置するVI層上面で色調の変化が認められた。周辺から縄文時代早期の遺物が数点出土した。埋土の状況はほぼ1号竪穴状遺構と同じであったが、最終面と考えられる硬化は認められなかった。1号竪穴状遺構と同じように南北側では深さに差異が生じているが、1号竪穴状遺構ほどではない（尚、南側の最終面は掘りすぎてしまった）。

また、埋土から時期を特定できる遺物の出土は認められなかったが、打製石斧、磨石、石皿、木炭が検出された。遺構内から生活用具である石皿、磨石が出土したことは、この遺構の性格を特定できる可能性がある。

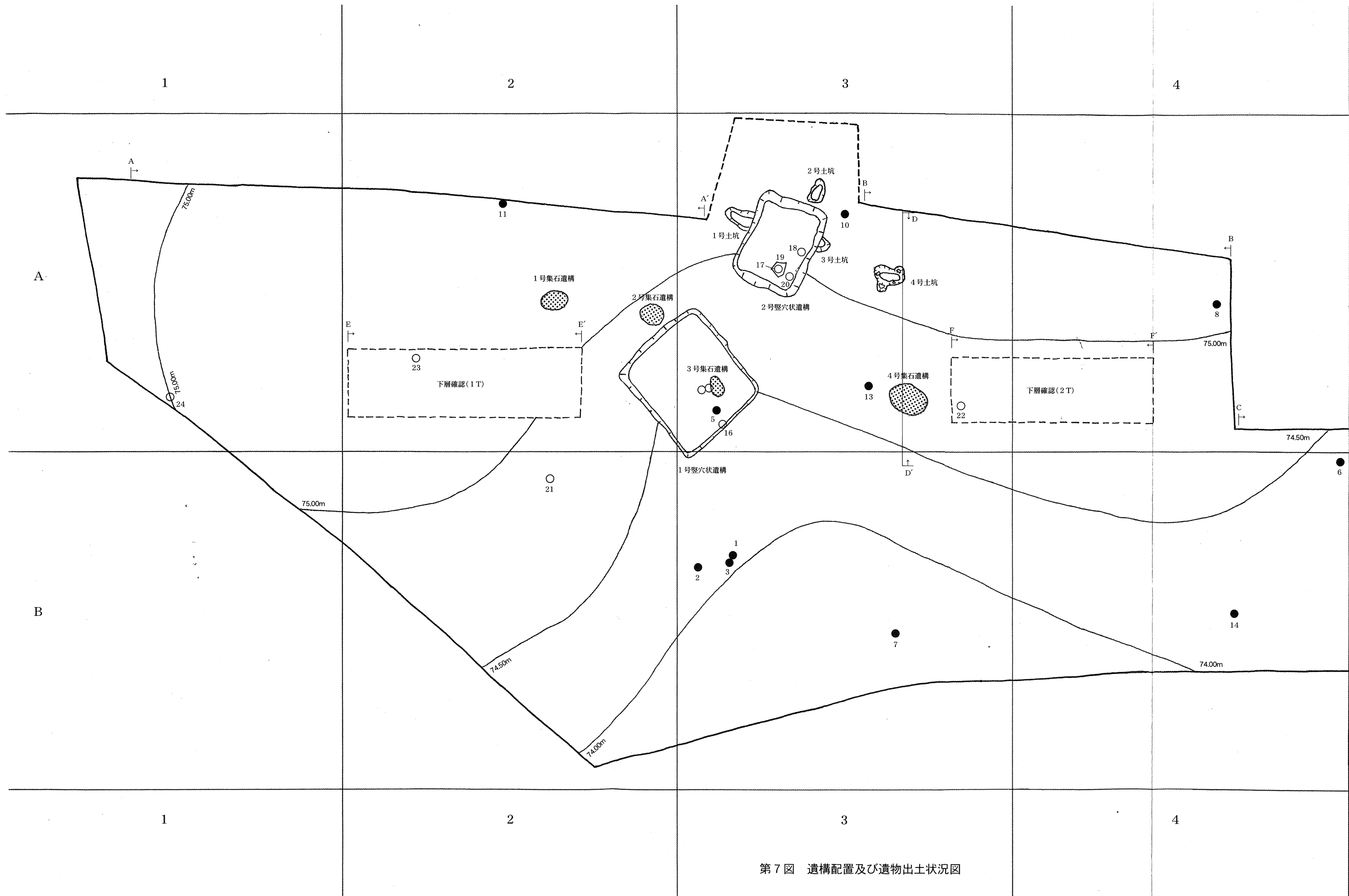
プランは隅丸方形で、最大286×218cmである。深さは最も深い部分で63cm、最も浅い部分で40cmであった。



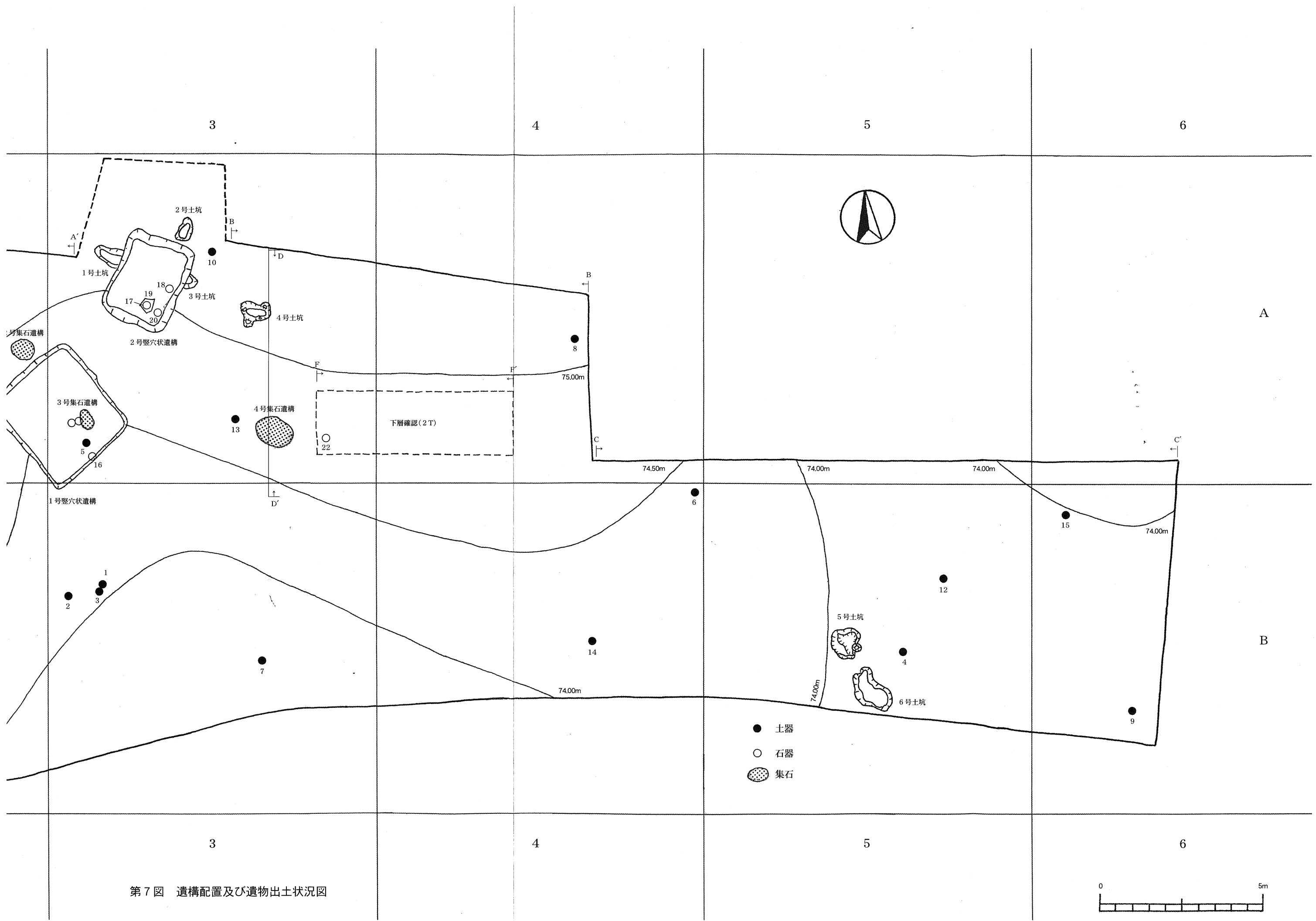
第4図 調査区域及びグリッド配置図



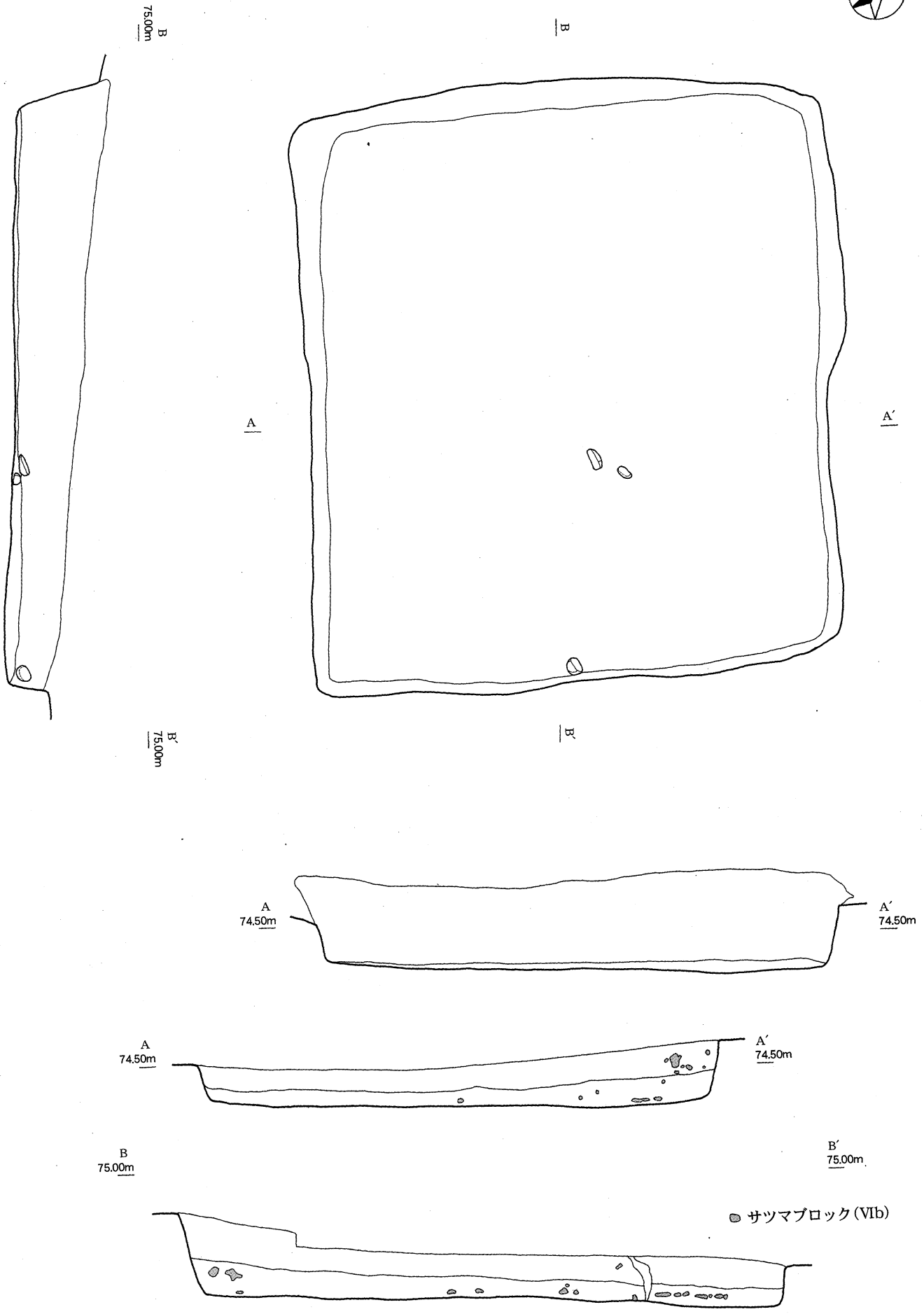
第5图 1~6区土层断面图



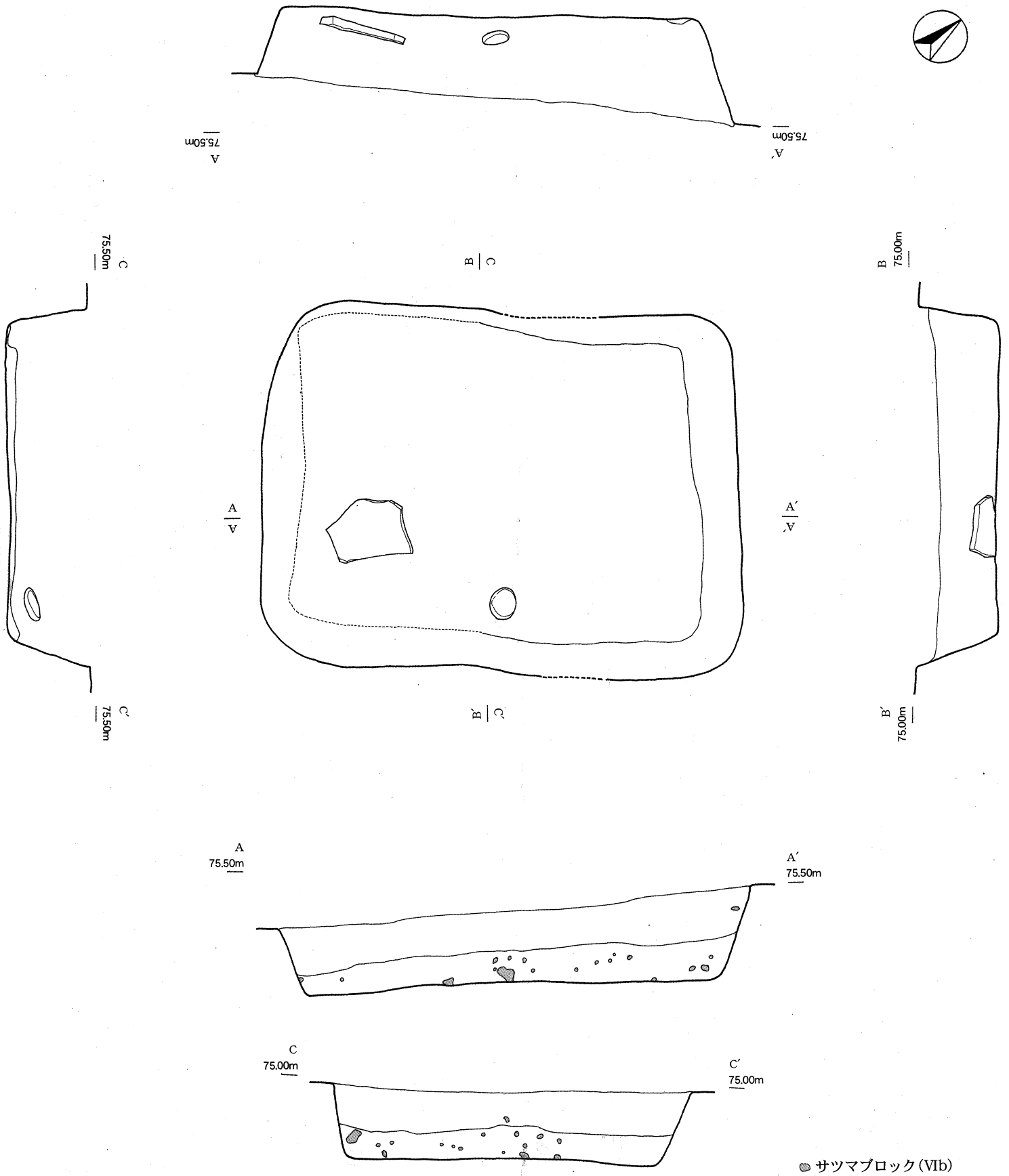
第7図 遺構配置及び遺物出土状況図



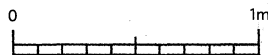
第7図 遺構配置及び遺物出土状況図



第8図 1号竖穴状遺構実測図



● サツマブロック (VIb)



第9図 2号竖穴状遺構実測図

2. 集石遺構

4基の集石遺構の検出面は、2・3-A区のVb層であった。旧地形が傾斜地であるためか、調査区南側では、集石遺構を構成したと考えられる、被熱した多数の礫が検出された。

1号集石遺構は $62 + \alpha$ 個、2号集石遺構は $45 + \alpha$ 個、3号集石遺構は $12 + \alpha$ 個、4号集石遺構は $183 + \alpha$ 個の礫で構成されていた。

2号集石遺構は小型ではあるが、比較的によくまとまっていた。3号集石遺構は構成する礫数が少ないため、集石遺構としてはやや不安が残る。また、4号集石遺構は多数の小角礫で構成されている点に特徴をもっていた。

① 1号集石遺構

2-A区のVb層で検出された。長径71cm×短径68cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で10cmであった。プランは楕円形の可能性が高いが、南側の大半は残存していない。

主に拳大の角礫で構成されているが、円礫も認められ、概ね3段が残存していた。石材は砂岩が主体を占め、やや被熱していた。

② 2号集石遺構

2-A区のVb層で検出された。1号竪穴状遺構の北側上位層で検出されていることから、竪穴状遺構より新しい可能性が高い。長短径の差異が小さく55cm前後でおさまる。検出面からの深さは、最も深い部分で11cmであった。プランはほぼ円形の可能性が高い。

主に拳大の角礫で構成されており、概ね3段が残存していた。石材は砂岩が主体を占め、かなり被熱していた。小型の集石遺構ではあるが、比較的よくまとまっていた。

③ 3号集石遺構

3-A区のVb層で検出された。長短径の差異が小さく、35cm前後でおさまる。遺構に伴う可能性がある掘込みを検出することはできなかった。1号竪穴状遺構の南側の上位層で検出されていることから、竪穴状遺構より新しい可能性が高い。構成する礫数が少ないため、集石遺構としてはやや不安が残る。石材は砂岩が主体を占め、やや被熱している。

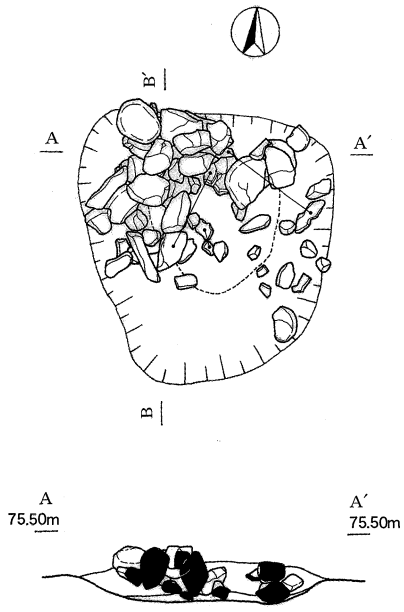
④ 4号集石遺構

3-A区のVb層で検出された。長径143cm×短径101cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で16cmである。プランは楕円形の可能性が高い。主に小角礫で構成されている点に特徴をもち、概ね4段が残存していた。石材は砂岩が主体を占め、かなり被熱していた。残存状況はあまり良くないと考えられるが、部分的によくまとまっていた。

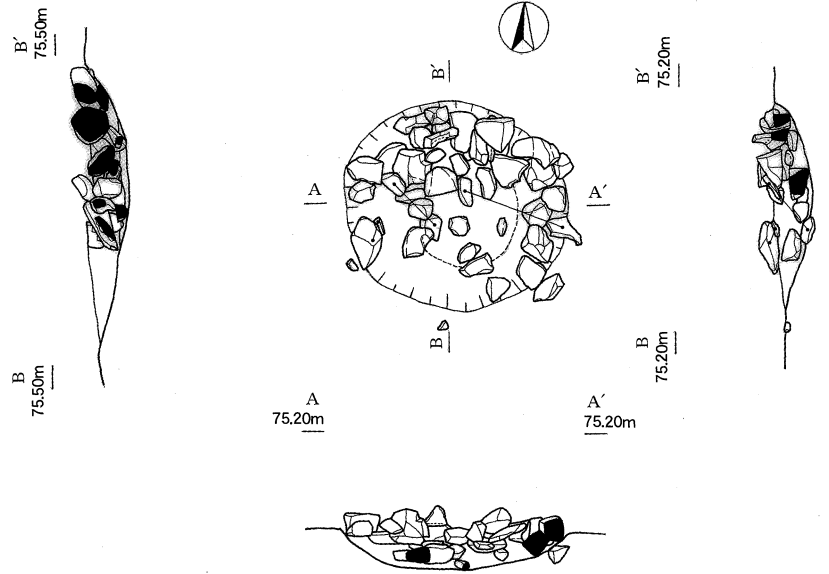
3. 性格不明土抗

6基の性格不明土抗の検出面はVI層であった。6基の土抗のうち、1～3号土抗は2号竪穴状遺構を掘り込んでいることから、竪穴状遺構より新しい可能性が高い。すべての土抗周辺から縄文時代早期の遺物が数点出土した。しかし、時期を決定できる遺構内からの出土は認められなかった。

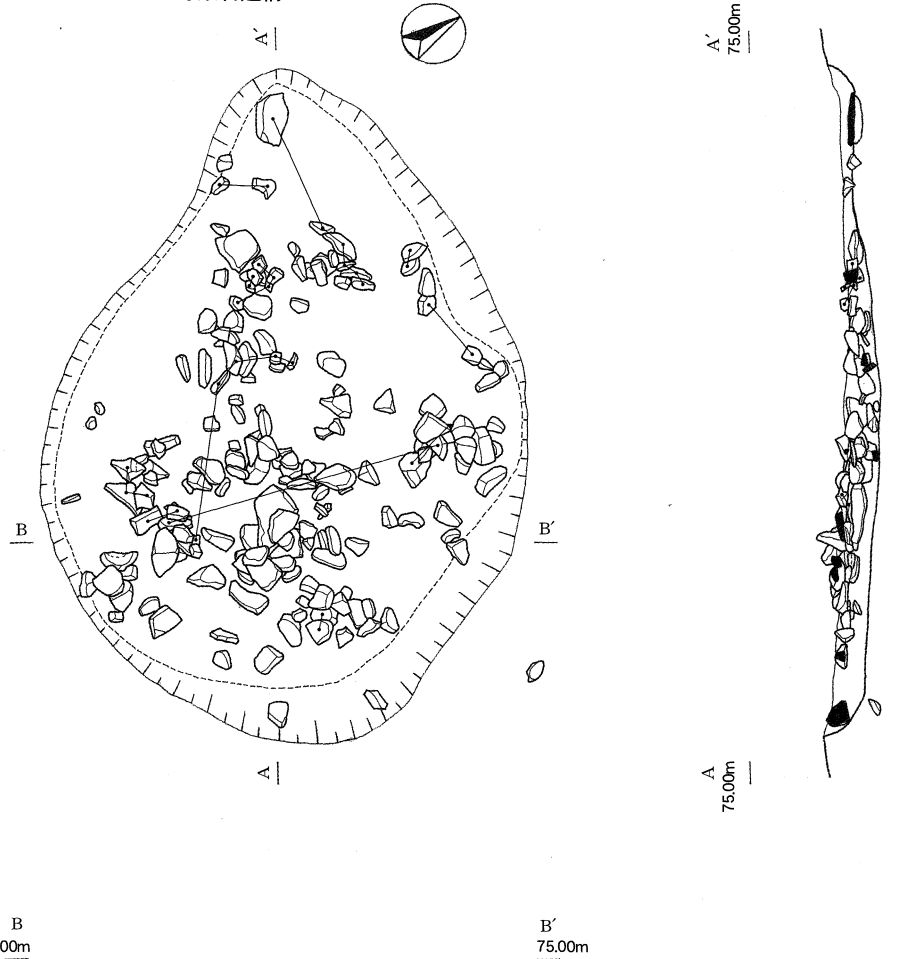
1号集石遺構



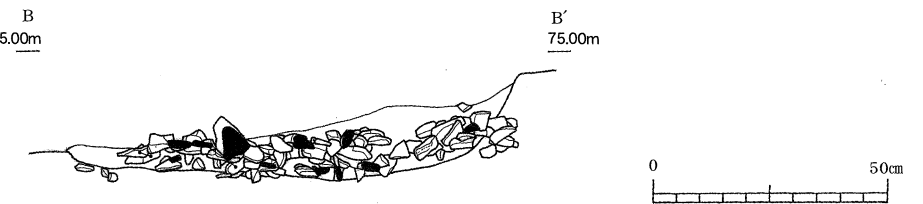
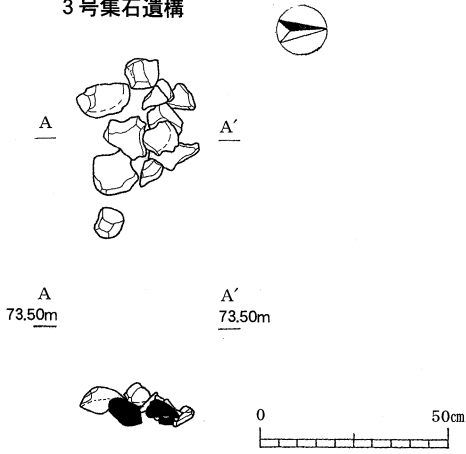
2号集石遺構



4号集石遺構



3号集石遺構



第10図 集石遺構実測図 (1~4号)

埋土には、ゴマシオ状の火山灰を比較的密に包含するが、層を形成するほどではなかった。この火山灰は桜島起源のP13の可能性が高いことが指摘されている。

① 1号土抗

3-A区のVI層上面で検出された。長径 $87 + \alpha$ cm×短径 $58 + \alpha$ cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で40cmである。プランは概ね不整長方形であった可能性が高い。

② 2号土抗

3-A区のVI層上面で検出された。長径 $73 + \alpha$ cm×短径 $42 + \alpha$ cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で31cmである。プランは概ね長方形である。埋土に木炭を多量に含んでいた。

③ 3号土抗

3-A区のVI層上面で検出された。長径 $27 + \alpha$ cm×短径 $40 + \alpha$ cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で20cmである。プランは概ね楕円形の中穴状である。

④ 4号土抗

5-B区のVI層上面で検出された。長径146cm×短径88cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で18cmである。プランは概ね不整長方形である。

⑤ 5号土抗

5-B区のVI層上面で検出された。長径96cm×短径92cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で11cmである。プランは概ね不整楕円形である。

⑥ 6号土抗

4-B区のVI層上面で検出された。長径92cm×短径74cmで、検出面からの深さは、最も深い部分で15cmである。プランは概ね不整楕円形である。

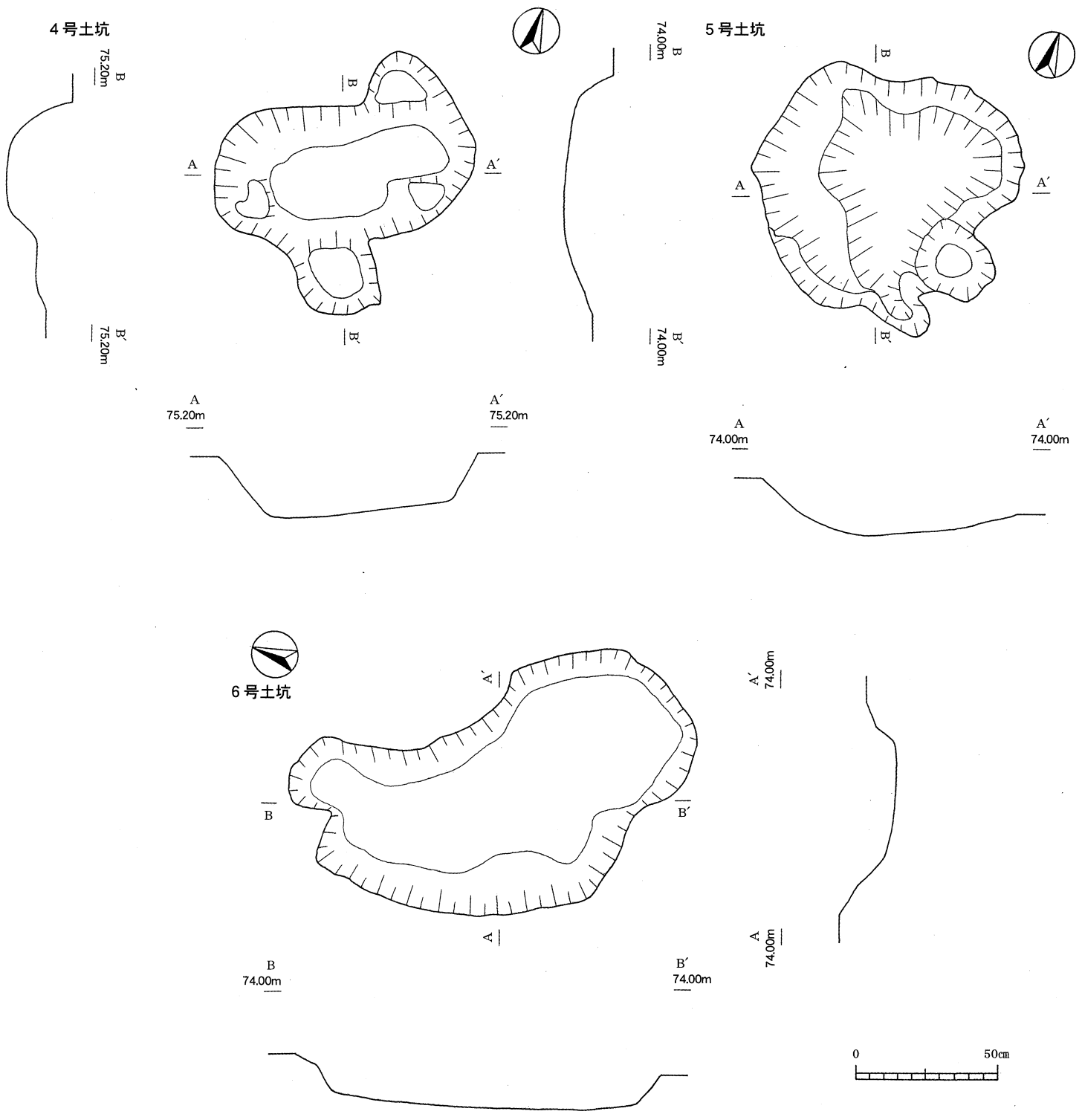
4. 遺構の切合い関係について

1号竪穴状遺構の上位層から2基の集石遺構が検出されており、竪穴状遺構より集石遺構のほうが新しい可能性が高いようである。さらに、2号竪穴状遺構には、3基の性格不明土抗が掘り込まれており、竪穴状遺構より土抗のほうが新しい可能性が高いようである。

以上のことから、遺跡としては二時期存在した可能性が高いことが予想される。

5. 竪穴状遺構の立地について

竪穴状遺構の立地は、旧地形における小谷に位置しているようであり、調査区の比較的高い微高地ではない。また、旧地形は全体的に北側から南側に向かって緩傾斜が認められる。竪穴状遺構はこの傾斜地に構築されており、北側と南側では深さに大きな差が生じている。



第12図 土坑実測図 (4~6号)

内であった。このことから、4号集石は何らかの理由により、小礫で構成されている集石遺構であることがわかる。

第4節 出土遺物

1～3は胴部に2重施文を施すものである。いずれも斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文が重ねられる。2重施文が密なものである。内面調整は粗いケズリで器壁が薄い。

1にはその間隔はわからないが、胴部上部に1.5cmのクサビ形貼付文が認められる。

4～6は胴部に貝殻押引文を施すものである。いずれも摩滅している。4は内面が黒褐色である。6は底部破片で、内面の粘土継目で剥落している。

7～12は胴部に綾杉条痕文を施すものである。

7、8は口縁部破片である。7は内湾気味に直口するものである。口縁部上端に6個単位の刺突文が横位に施されている。口縁部形成時のものか、指頭圧痕が内外面に残る。8は口唇部に刻目をもち、若干外反する口縁部である。口縁部上端から下になるにつれて器壁が薄くなっている。

9～12は胴部に綾杉条痕文を施すものである。9、10は3本単位の工具で文様が施されている。9の外面にはススが付着している。10は器壁が薄く、内面はミガキ調整である。11の内面はケズリ後ミガキ調整で、器壁は厚い。12は内外面とも摩滅している。

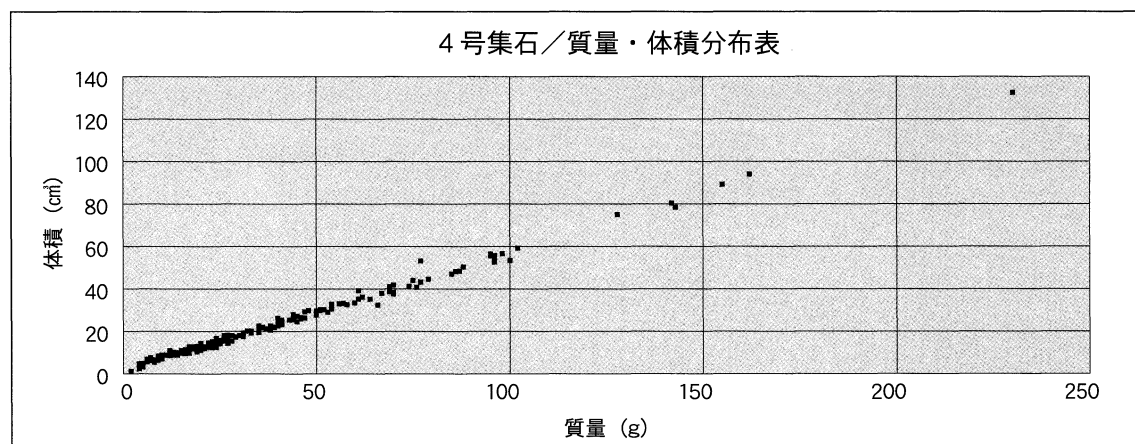
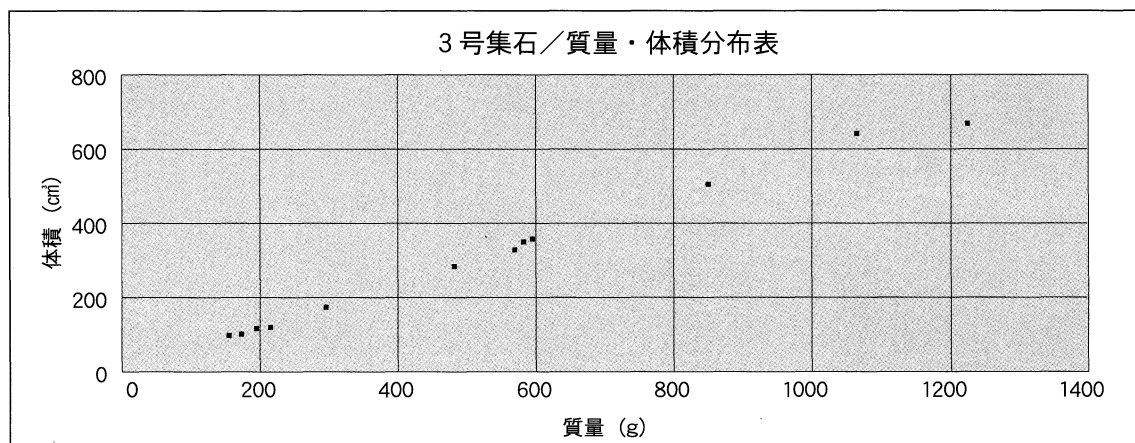
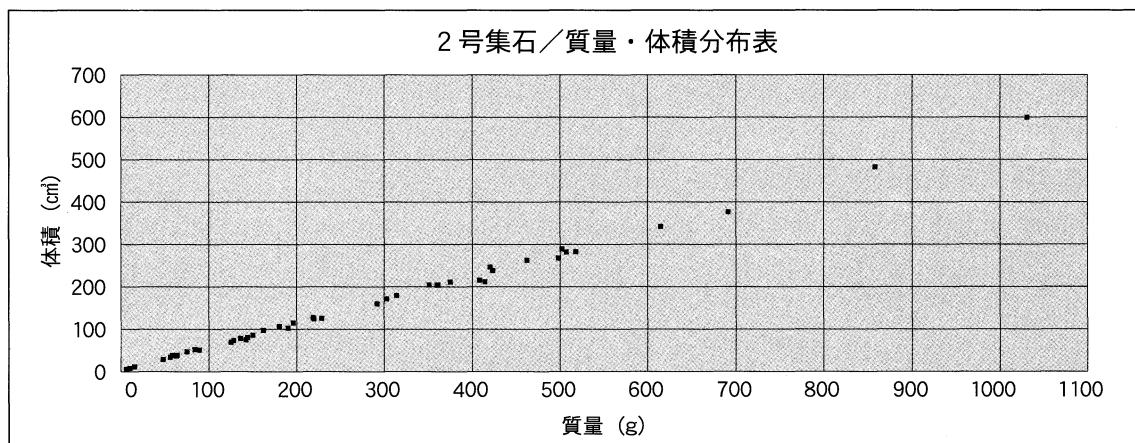
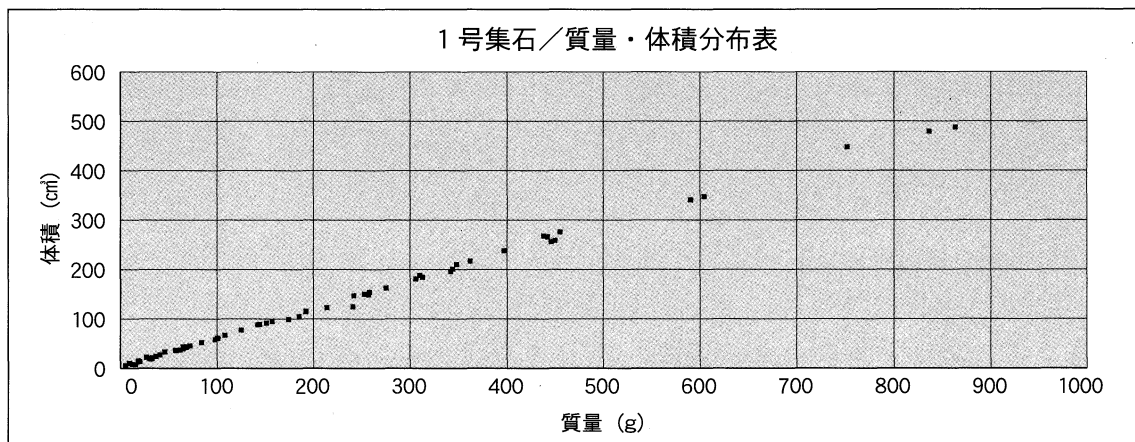
13～15は上記に分類できなかったものである。13は胴部上部に刺突文が横位に施され、下部にヘラ状工具による不規則な沈線が施されるものである。沈線は少なくとも2種類あり、細かい沈線の後に太い沈線が重ねられている。14は底部近くの破片と考えられるが、無文である。内外面とも摩滅している。15は外面が摩滅している。不明瞭ではあるが、条痕らしきものも胴部下部に認められる。

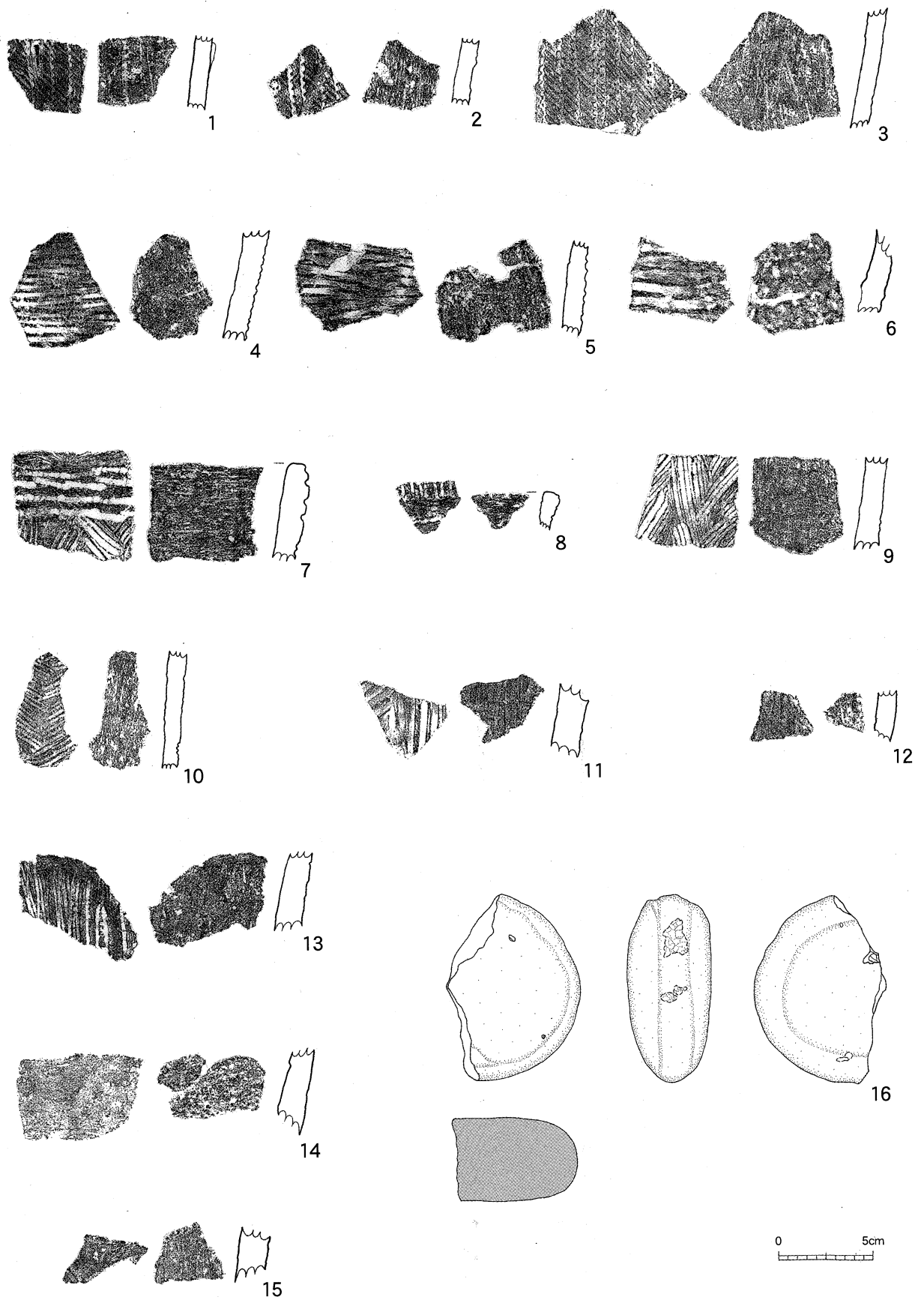
16～20は遺構内出土の石器である。16は1号竪穴状遺構から出土した花崗岩を素材とする磨石の欠損品である。17、18は砂岩を素材とする磨石で、2号竪穴状遺構から出土した。

19は2号竪穴状遺構から出土した板状の大きな石皿で、砂岩を素材とする。両面に磨痕が認められる。20は2号竪穴状遺構の最終面近くから出土した扁平打製石斧の欠損品で、頁岩を素材とする。

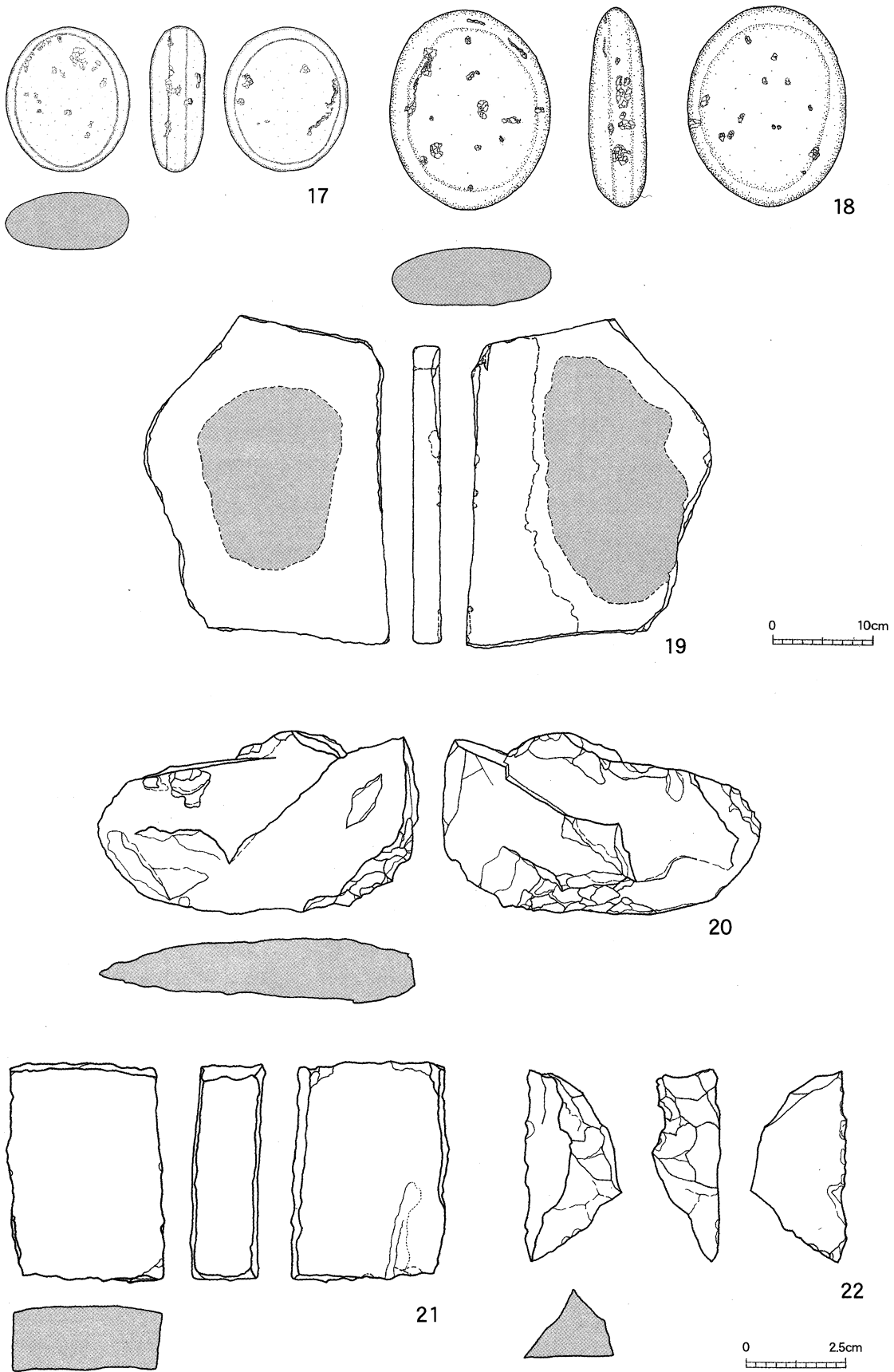
21～24は包含層出土の石器である。21は砂岩を素材とする、砥石状の欠損品である。表面に磨痕が認められる。22は剥片で、頁岩を素材とする。23は砂岩を素材とする、板状の石皿の欠損品である。24は扁平な棒状石器で砂岩を素材とする。

第2表 質量・体積分布表

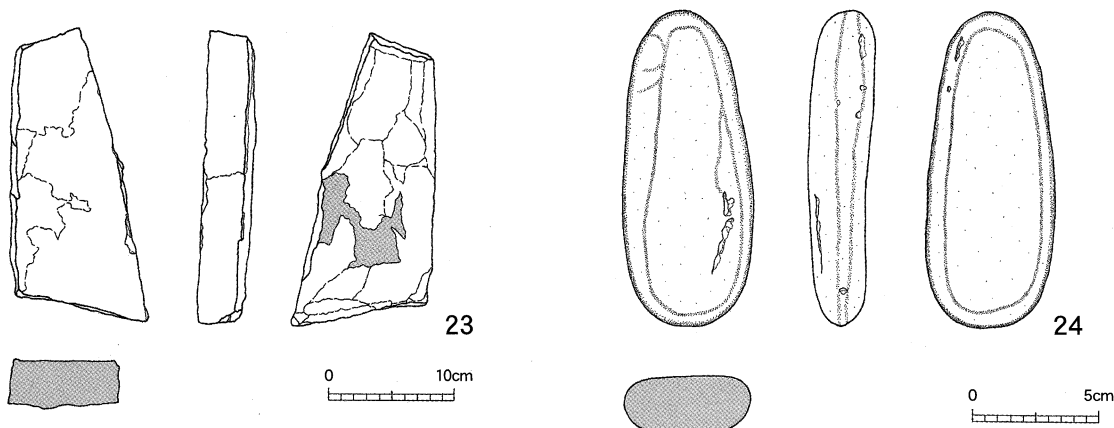




第13図 出土遺物実測図(1)



第14图 出土遺物実測図(2)

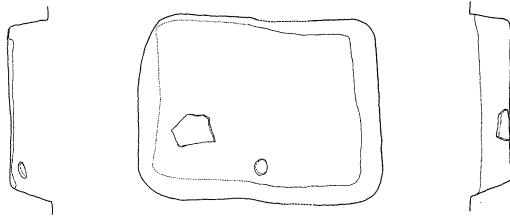
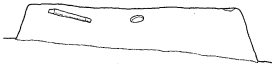
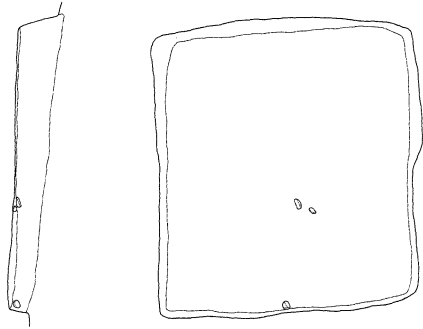


第15図 出土遺物実測図(3)

第3表 土器観察表

K(角閃石) S(石英) C(長石) U(雲母) R(小石)

| 遺物 番号 | 出土区 | 層 | 器種 | 部位 | 胎土 | 色 調 | | 器 面 調 整 | | 焼 成 | 備 考 |
|----------|-----|----|----|-----|---------|--------------|--------------|----------|---------|-----|-----|
| | | | | | | 内 | 外 | 内 | 外 | | |
| 1 | 2-B | Va | 深鉢 | 胴部 | K.S.C | 10YR6/4にぶい黄橙 | 2.5Y5/2暗灰黄 | ケズリ | 条痕 | 不良 | 摩滅 |
| 2 | 2-B | Va | 深鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 2.5Y7/3浅黄 | 10YR6/4にぶい黄橙 | ケズリ | 条痕 | 良 | |
| 3 | 2-B | Va | 深鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 2.5Y7/3浅黄 | 10YR6/3にぶい黄橙 | ケズリ | 条痕 | 良 | |
| 4 | 5-B | Vb | 深鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 10YR3/1黒褐 | 10YR6/4にぶい黄橙 | ナデ | 条痕 | 良 | 摩滅 |
| 5 | 4-B | Vb | 中鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 10YR6/4にぶい黄橙 | 2.5Y6/3にぶい黄 | ナデ | 条痕 | 良 | 摩滅 |
| 6 | 3-A | Vb | 深鉢 | 底部 | K.C.R | 10YR6/4にぶい黄橙 | 10YR6/4にぶい黄橙 | ナデ | 条痕 | 良 | 粘土継 |
| 7 | 3-B | Vb | 深鉢 | 口縁部 | K.S.C.R | 7.5YR7/4にぶい橙 | 10YR8/3浅黄橙 | ナデ | 条痕 | 良 | 目 |
| 8 | 3-A | Vb | 深鉢 | 口縁部 | K.S.C.R | 10YR5/3にぶい黄橙 | 2.5Y5/3黄褐 | ナデ | 条痕 | 不良 | |
| 9 | 6-B | Vb | 深鉢 | 胴部 | K.S.C | 10YR5/2灰黄褐 | 10YR5/2灰黄褐 | ナデ | 条痕 | 良 | 摩滅 |
| 10 | 3-A | Vb | 深鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 2.5Y5/2暗灰黄 | 10YR6/2灰黄褐 | ケズリ? | 条痕 | 良 | スス付 |
| 11 | 2-A | Va | 深鉢 | 胴部 | K.S.C | 10YR5/3にぶい黄橙 | 10YR6/3にぶい黄橙 | ケズリ・ミガキ? | 条痕 | 良 | 着 |
| 12 | 5-B | Vb | 深鉢 | 胴部 | K.S.C.U | 10YR6/3にぶい黄橙 | 10YR6/3にぶい黄橙 | ケズリ? | 条痕 | 良 | |
| 13 | 3-A | Va | 中鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 2.5Y6/3にぶい黄 | 10YR6/4にぶい黄橙 | ケズリ?・ナデ | 条痕 | 良 | |
| 14 | 4-B | Vb | 深鉢 | 胴部 | K.S.C.R | 10YR6/4にぶい黄橙 | 10YR7/4にぶい黄橙 | ナデ | 条痕 | 良 | 摩滅 |
| 15 | 6-B | Va | 深鉢 | 胴部 | K.S.C | 10YR6/4にぶい黄橙 | 10YR7/4にぶい黄橙 | ナデ | 条痕・ミガキ? | 良 | |



第IV章 まとめにかえて

① 竪穴状遺構について

今回の弓場ヶ尾遺跡の全面発掘調査では、竪穴状遺構2基、集石遺構4基、土抗6基が検出された。それぞれの遺構の切り合い等から、遺跡としては二時期以上存在した可能性が高い。竪穴状遺構の具体的な時期は明確ではないが、埋土から桜島起源のP13の可能性が高い火山灰が発見されている。

また、それぞれの竪穴状遺構周辺から柱穴等は検出されていないが、磨石、石皿等の遺物が遺構内から検出されていることから、竪穴住居跡の可能性は高いことが想定される。

さらに、傾斜地に構築されている点を考慮しても、検出面から最も深いところで47cmを超える床面をもつ遺構検出はひとつの成果であろう。

② 出土遺物等について

出土した遺物は、加栗山式土器、吉田式土器、石坂式土器、これらに分類できないものとして考えた。加栗山式土器は長野、前迫両氏の提唱によるものであり、寺師、新東両氏の知覧式土器と同型式である。吉田式、石坂式土器は河口氏の提唱によるものである。

今回の調査対象地区においては、遺構検出数と遺物出土数を単純に比較すると、極端に遺物出土数が少ないことに遺跡の特徴がある。

遺跡自体は北側に拡大していく可能性が高いが、遺物の出土数を考慮するとキャンプサイト的な遺跡であった可能性は否定できないであろう。

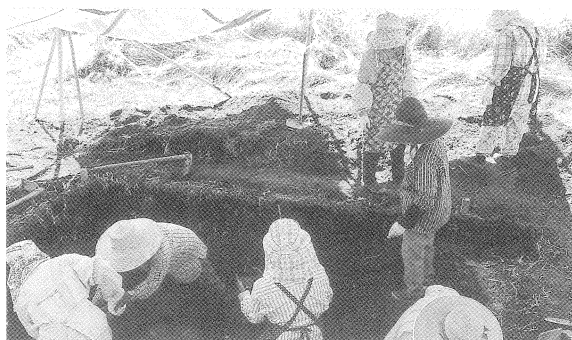
写真図版



遺跡近景(南より)



遺跡近景(北より)



作業風景(3T)



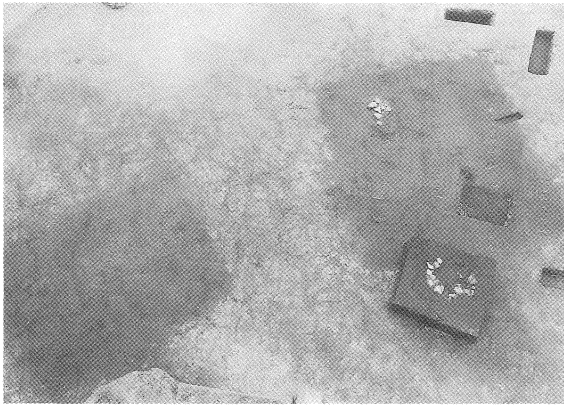
土層断面(3T)



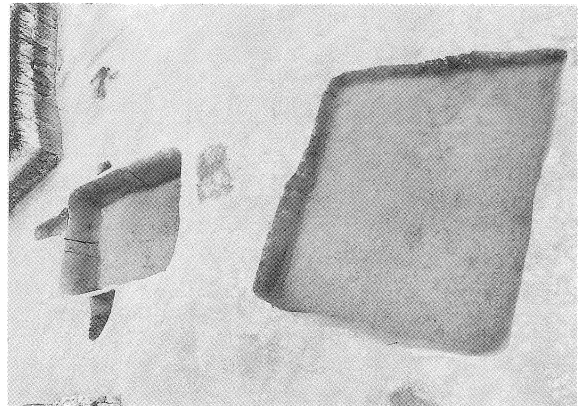
作業風景(3T)



遺構検出状況(4T)



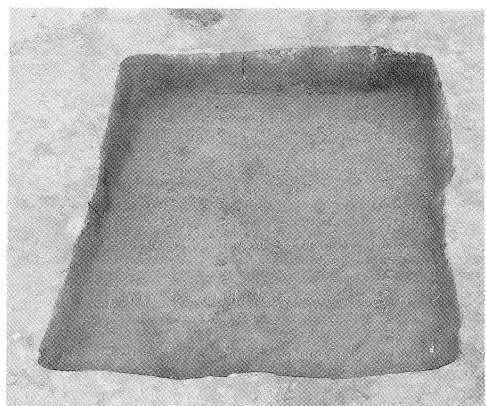
竪穴状遺構検出状況(1・2号)



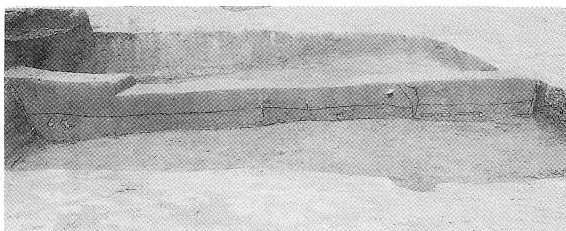
竪穴状遺構完堀状況(1・2号)



集石遺構(2・3号)及び竪穴状遺構検出状況(1号)



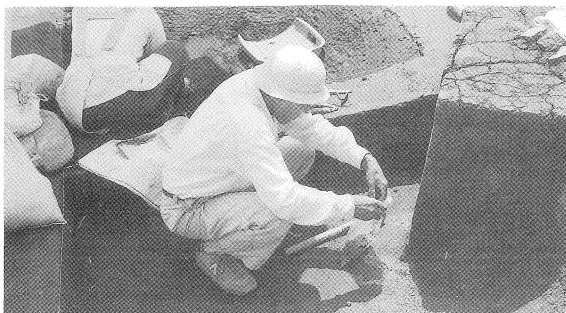
竪穴状遺構完堀状況(1号)



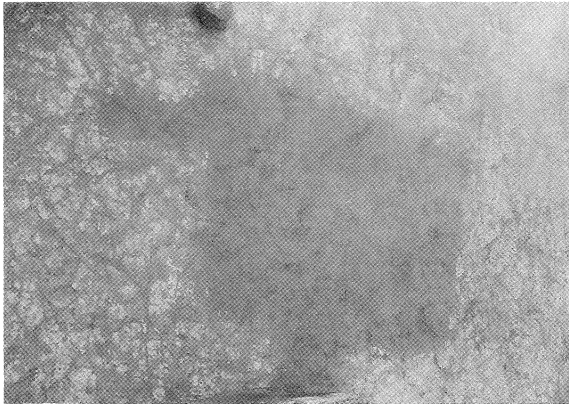
竪穴状遺構内土層断面(1号)



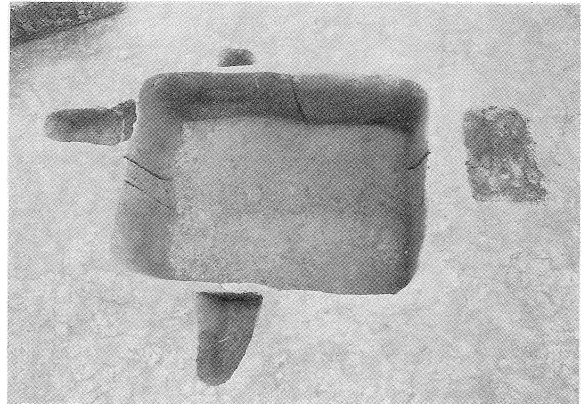
森脇 広氏 指導風景



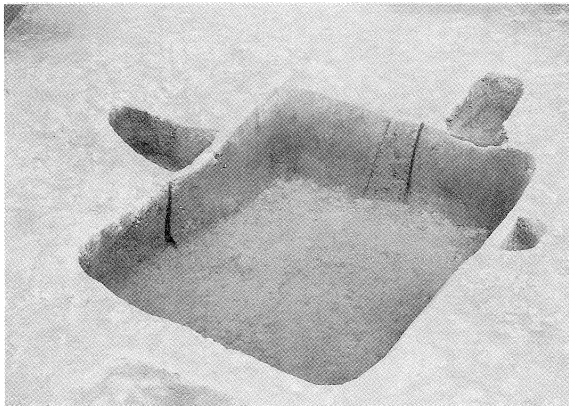
サンプリング風景



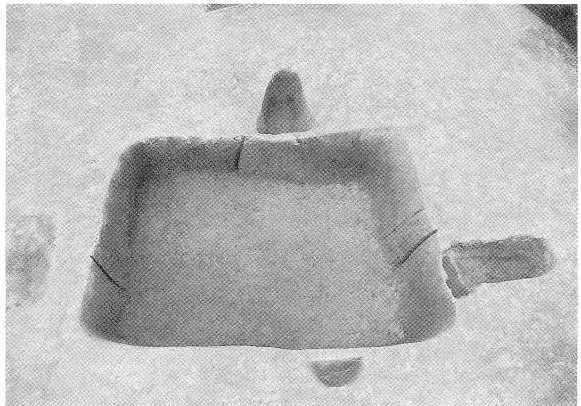
竪穴状遺構検出状況(2号)



竪穴状遺構完掘状況(2号)



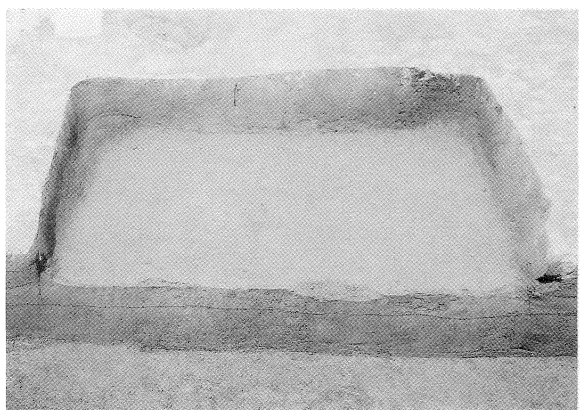
竪穴状遺構完掘状況(2号・南より)



竪穴状遺構完掘状況(2号・東より)

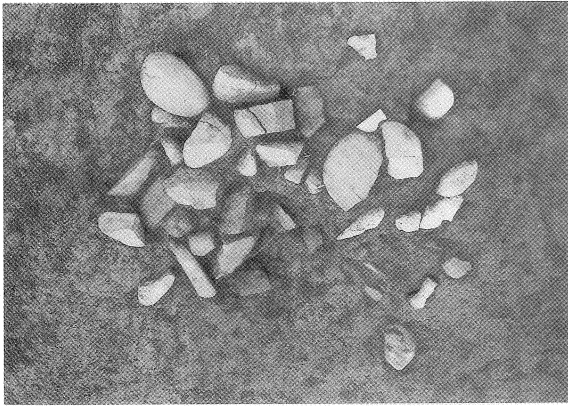


竪穴状遺構内土層断面(2号)

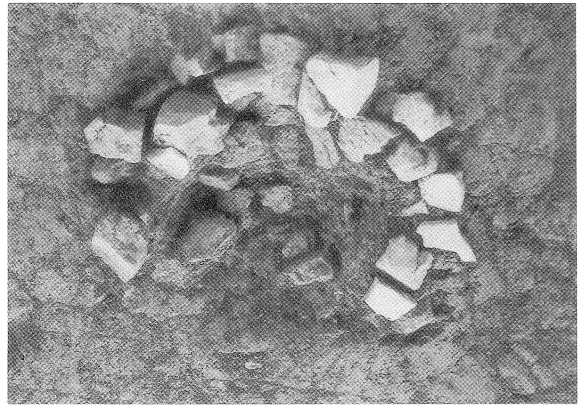


竪穴状遺構断面(1号)

図版 4



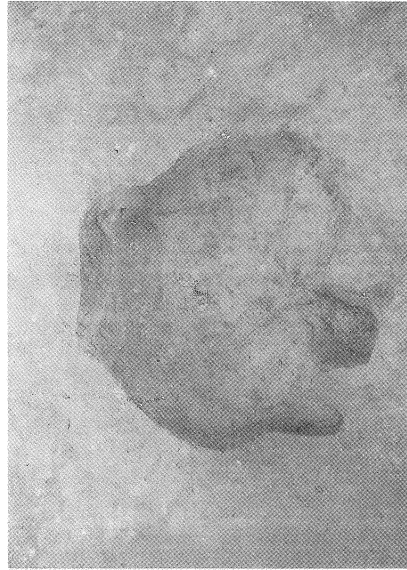
集石遺構検出状況(1号)



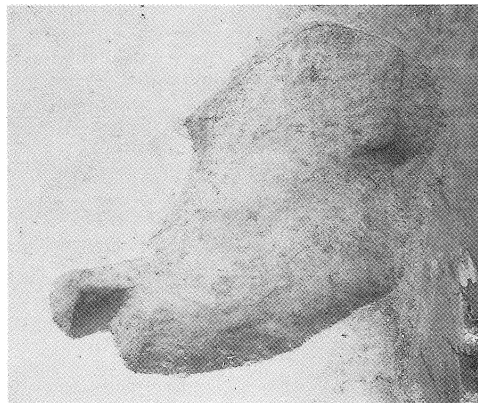
集石遺構検出状況(2号)



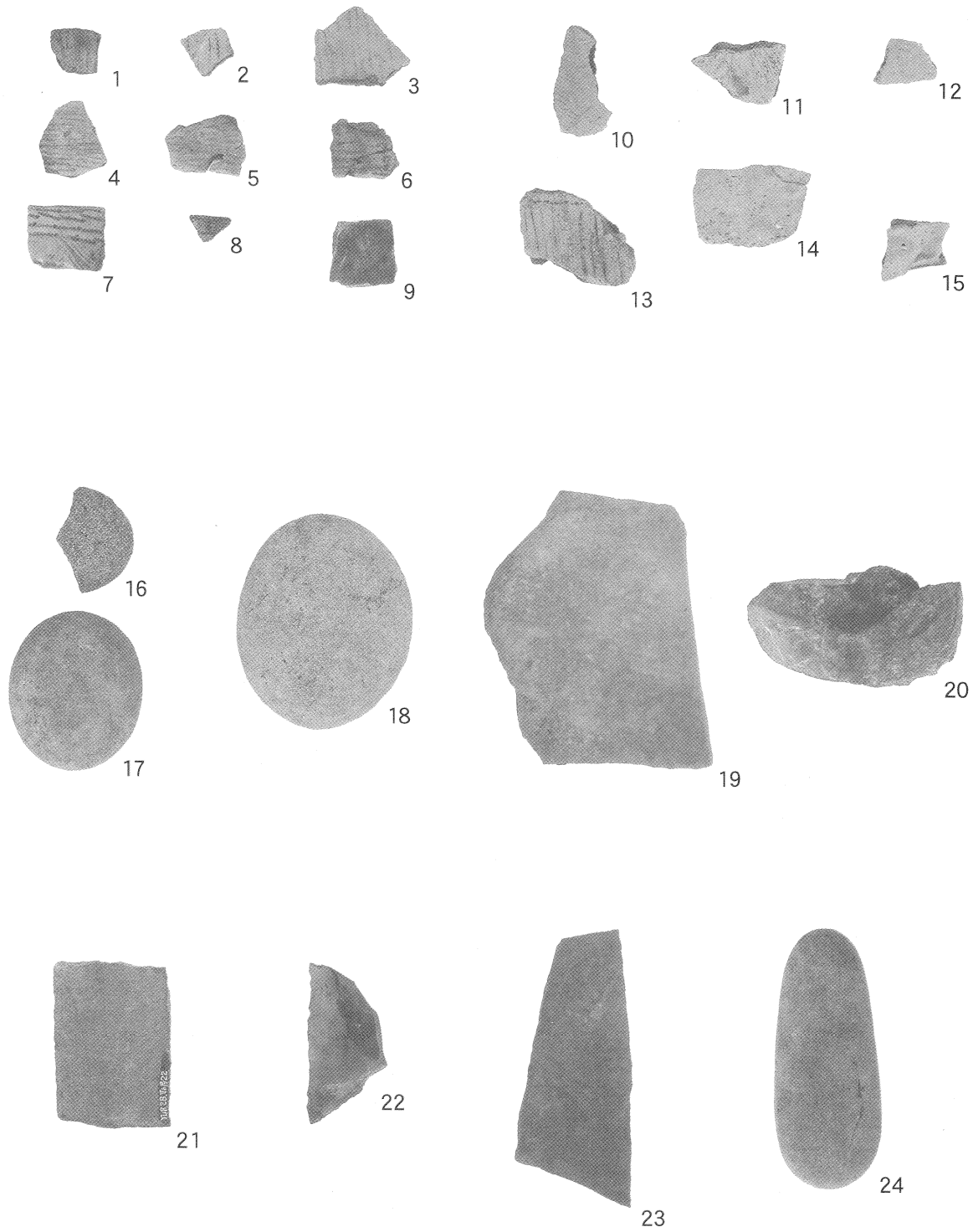
土坑検出状況(4号)



土坑検出状況(5号)



土坑検出状況(6号)



出土遺物 (1)~(3)

あとがき

弓場ヶ尾遺跡の発掘調査報告書もようやく刊行にこぎつけた。

猛暑の中、3か月に渡る弓場ヶ尾遺跡の発掘調査は終了した。現場は晴天に恵まれ毎日が炎天下での発掘作業となった。

猛暑の中での作業で検出面がすぐ乾き動力噴霧機を利用し、数切れないほどの遺構検出作業を実施したことは、特に印象に残っている。

作業員の皆様には、連日、猛暑の中での山鍬打ち作業で、大変な仕事であったことから感謝の気持ちでいっぱいである。

今回、発掘調査に参加された作業員の皆様は、初めて経験される人が多く、遺跡の発掘作業がこんなに大変なことだとは知らずに、参加された方々がほとんどであった。そういう意味では脱落者も少なく楽しく過ごせた良い現場として記憶に残る現場となった。

発掘調査全体としては、遺構等についてはある程度の成果があったが、遺物出土が町内の同時期の遺跡としては極端に少ないことが、弓場ヶ尾遺跡のひとつの特徴でもあった。

発掘調査・報告書作成にあたっては、できる限り詳細な記録を残すことに心がけたが、不備を承知のうえで、報告しなければならないことは、心苦しい限りである。今後、機会をみて不備を修正し、その責務を全うしたいと考えている。

本報告書を作成するにあたり、多くの方々に御協力、御教示をいただいた皆様には、衷心より感謝申し上げる次第であります。



(発掘現場作業員)

外業作業員（50音順）。

生重美恵子、大久保 泉、木上美樹子、香川広子、上出幸夫、北村広子、検崎ハツ子、
下山エル、杉尾木の実、園田テル、竹山求、立山政子、寺山京子、春口 稔、春口ノリ子、
早瀬久子、懐 俊裕、前園広子、又木哲朗、松尾穂美子、吉元ヨシ子

内業作業員（50音順）。

生重美恵子、大久保 泉、杉尾木の実、瀬下満由美、松尾穂美子

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(35)

弓場ヶ尾遺跡

発行日 平成17年3月

発行 志布志町教育委員会(鹿児島県曾於郡志布志町志布志二丁目1番1号)

印刷所 志布志印刷有限会社(鹿児島県曾於郡志布志町安楽1966-2)